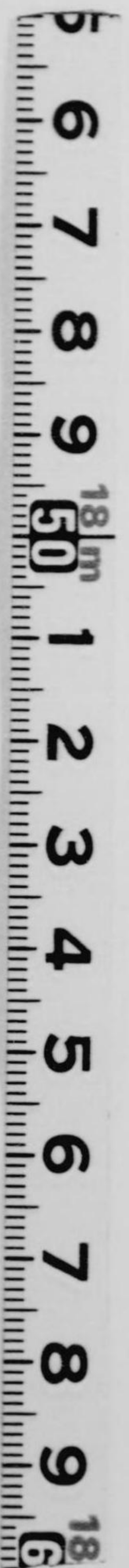
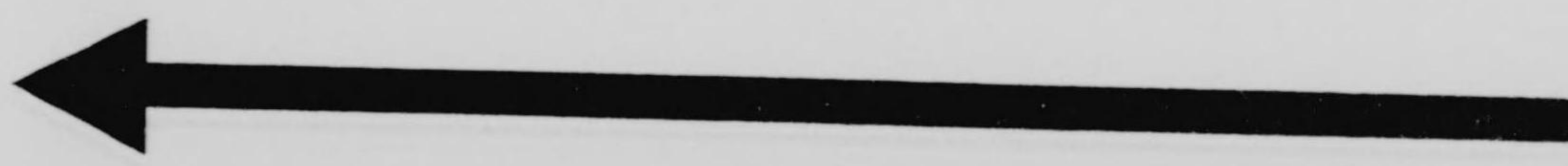


375
27



始

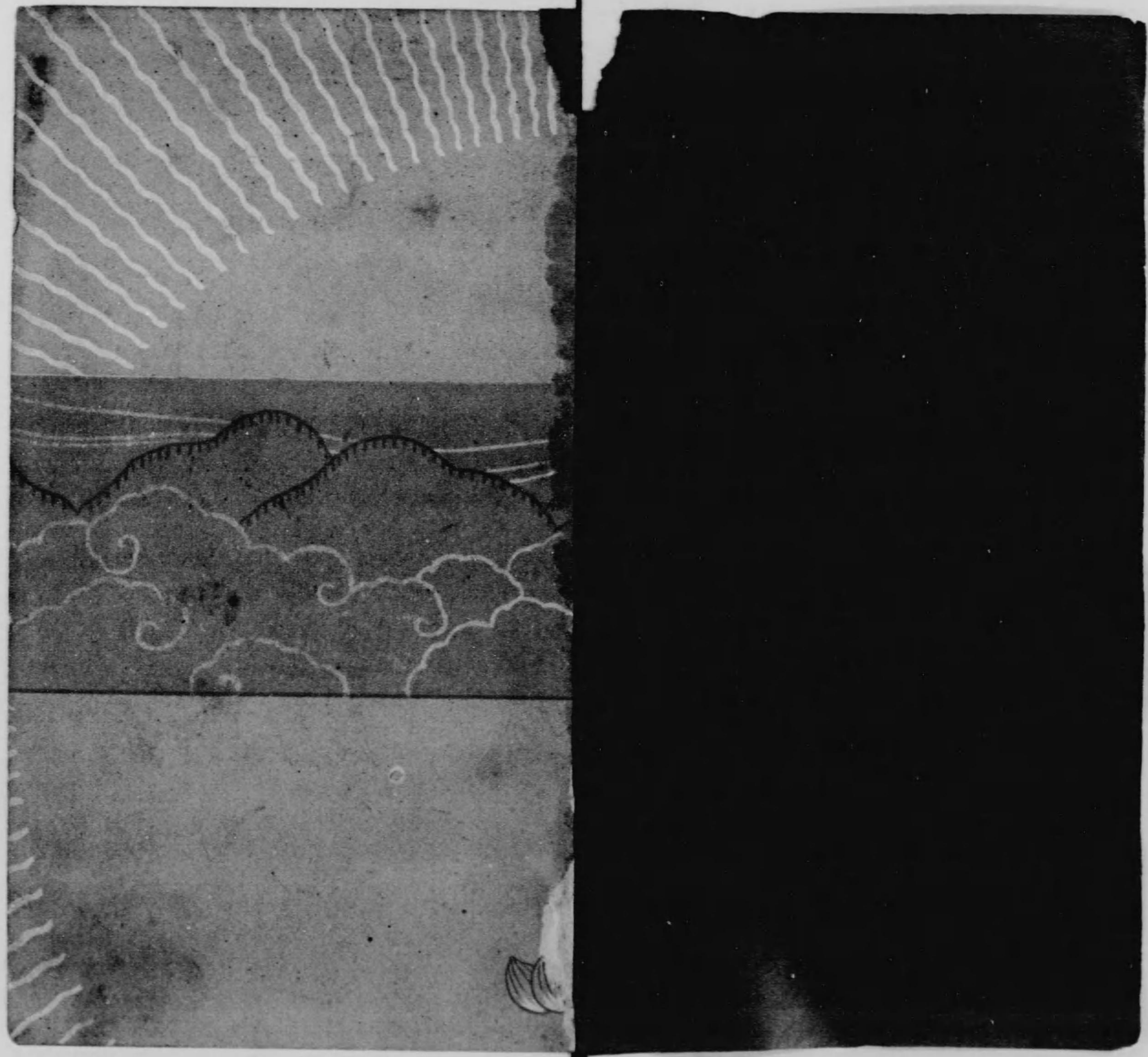


242

242

242

242



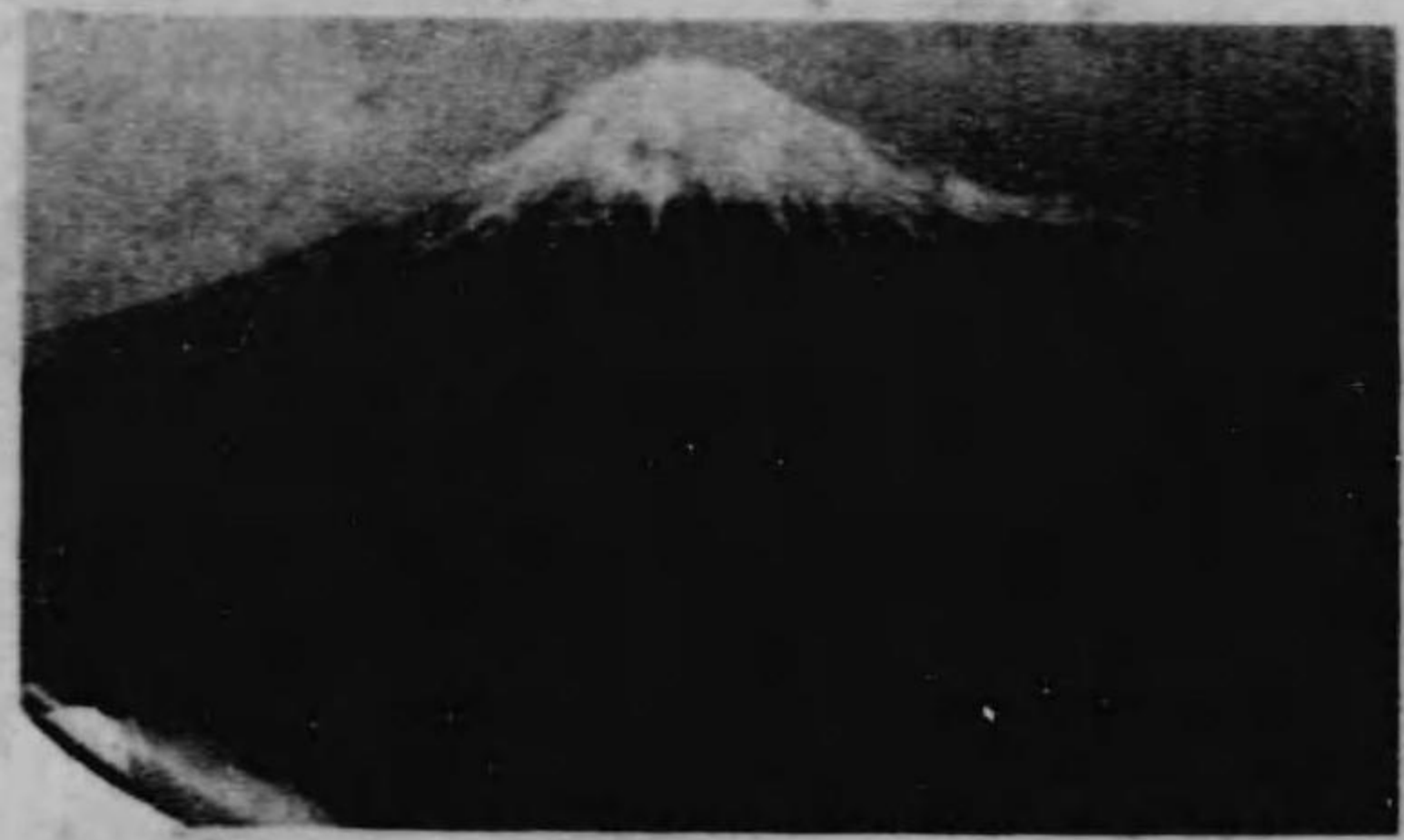
望 遠 士 宮

裏 日
見 光
の
瀧

寺 福 興 良 奈
松 の 花 堂 金 東 塔 重 五

上 山 島 屋

△望ヲ島豊及島豆小リヨ嶺古談



富士 意 望

淨 真 興 隆 寺
正 運 社 東 金 堂 蘇 心 塔

日 蓮
光 見
心 齋

皇 山 土
類 古 形 = 小 豆 山 八 豐 高 寺 院 A

375-27



序

人或は科學と宗教とを以て吳越同舟の感を懷くもの無
 きにあらざるが如きも。等しく宇宙大自然に對する觀
 察冥想に其立脚の基礎を有し。觀察の向ふ方面を異に
 するも。根本的に乖離隔絶するものにあらず。是を以
 て。自然に對する科學的觀察は。他面に於て宗教的情
 操の發露を妨げず。眞の宗教的信念は。科學研究の發
 達に依りて破壊せらるる事なく。兩々相俟ち相扶けて
 益々社會文化の進運に貢献し。人類の幸福を向上すべ

大正
 8. 4. 1
 内交

し。
今や驚鈍自ら揣らす。這般の觀察と感想とを輯蒐叙述して之を公にせんとす。庶幾くは大方諸士。著者の微衷を諒とし。幸に多大の提撕を吝む無からん事を。本書の編纂に關し。青森徳英氏に負ふ處頗る多し。茲に特記して感謝の意を表す。

大正己未世界平和第一年初卷

著者誌

緒

僕、さきに石川先生の囑を受け、先生が近年各所に於て試みられたる講演の概要を蒐めて、一卷の講演叢書となさん事を護法館主に約し置きたり、然るに僕天性疎懶、加ふるに現に慈善協會等の會務にたづさわりて全く力を注ぐ能はず、往昔今日に至りしが、漸く編纂一段落を告げ、纒かに其責を塞がむとす。

茲に石川先生の下囑に對し、一方江湖の讀者に向つて厚く其意を諒せられむ事を請うもの也。

本書を上、中、下の三篇に分かちたるは固とより根據ある分類法に依るにあらず、唯講演の内容形式に於てや、其趣を同

うするものを纏めて各篇に按排せるに止まるものとす、従つて講演の年次前後錯綜せる處あるを免れず、併はせて寛恕を希ふ。

石川先生の科學と宗教に對する觀察所見に就きては、既に先生の信條あり、見地あり、若し之等の思想に關し、根柢ある先生の所論を聽かむには、異日必らず別に先生の大著述を見るの日あるべし、是れ僕の讀者と共に深く先生に懇請して止まざる處なり。

一言贅辭を述べ。

洛西の寓居に於て

青 森 德 英

大正八年二月

上 編
目 次

| | |
|------------|----|
| 萬有の意義 | 三 |
| 動と静 | 一六 |
| 花と求道 | 三二 |
| 宗教に縁ある植物の話 | 四〇 |
| 三部經の中の動物の話 | 五二 |
| 讀經生活と腹布教 | 六三 |
| 青年と斷行力 | 七六 |
| 輪廻について | 八七 |
| 修養と研究 | 九九 |

自然科学と宗教上

理學士 石川成章

萬有の意義

無数の世界

眼に見ゆるいろくの色、さては物の形、耳に聞くいろくの音、鼻に嗅ぐいろくの匂ひ、口に味ふ色々の味、吾々はまことに複雑多様の世界の真ん中に住んでゐる。吾々個人々々の五官に觸れて來る森羅萬象でさへ、少し氣をつけて考へて見ると、不思議なほど複雑であり多様であるのに、吾々が一生涯五官に觸れる事のできない遠方にある東西上下十方の世界、又は手近

い所にあつても吾々の知る事のできない、極小極大の世界、さういふ数知れぬ世界の中に存在する個々物々は如何なる算盤の桁にも箱らぬほど多数多岐に亙つてゐるのである。そこでこの偉大なる自然界の全體を考へるの對象として、一體それらは何のために存在し、如何なる目的を持つて居るのであらうかといふ事を考へて見るといふ事は、考へる事を知つてゐる吾々人間としては是非やつて見ねばならぬ事なのである。

さて萬有の意義目的如何といふ事を考へて見ると、當然の結果として恐らく二通りの解釋が生れて來るであらうと思ふ。即ち萬有はまるで何等の意義もなく目的もなく、支離滅裂にして存在してゐるのであると考へるのがその一つで、今一つは萬有は一見支離滅裂のやうであつても、其中には自ら一つの統一を持つてゐるものであつて、終始透徹一貫せる意義と目的のため

二つの解釋

萬有の意義と目的

に存在してゐるのであつて、個々物々の間には自ら理路整然たる秩序があると考へると、この二つである。

自分は右の二つの解釋の中、後者の見解が至當でなければならぬと考へる即ち萬有は明々白々たる意義と目的のため存在し、一瞬一刻と雖もその意義を破壊した事なければ、目的を忘れた事もなく、營々として努力し、精進し、全力を盡してその意義と目的の實現を圖つてゐるのであると信ずる。自分は今この事を理科學的智識の方面、及宗教的愛情の方面との二つの立脚地から、至極簡単に説明して見たいと思ふ。

理科學の上では、この複雑多様の世界即ち萬有を研究するに便宜を得るため、大別して二つの世界に分類して居る。即ち有生物界と無生物界との二つである。有生物界とは動物植物の世界であつて、無生物界とは礦物の世界で

一つの法則の下に動く萬有

萬有の意義

物質の變化
と物性の變化

ある。然しながらこの二つの分類は研究の取扱ひの便宜の上から別けたものであつて、徹頭徹尾別異のものではないといふ事を忘れてはならない。何故かといへば、この二つの世界は不思議にも唯一つの法則の下に動いてゐるからである。その法則は萬有は時々刻々變化するといふ法則である。今少しくその事を説明して見やう。

先づ有生物界即ち動植物の世界には、個體の上には生育、生殖、老衰、枯死といふ變化が行はれて居り、群體若しくは種族の上には進化又は退化といふ變化が行はれてゐる。次に無生物界即ち礦物の世界には物性の變化と物質の變化との二通りの變化が行はれてゐる。物性の變化とは所謂物理的變化であつて、例へば水が氷となる如くその他冷暖、滑澁、輕重の變化、固體、液體、瓦斯體の三態の變化、及び電氣磁氣等のエチルギーの變化は物理的變化

ダイヤモンド
は永久不
滅か

即ち物性の變化である。物質の變化とは例へば木炭が燃焼して灰となるやうに、化合、分解、電解、熱解の如きは化學的變化即ち物質の變化である。

かくの如く有生物界、無生物界を通じて、時々刻々に行はれてゐるものは變化といふ作用である。この作用は一刻一瞬間の間と雖も決して止まる事なく、必ず常に行はれてゐるのである。

右のやうに述べると、一般に不審を抱く人がないとも限らぬ。成程生物の變化といふ事はいかにも尤もで生れるといふ事があれば死ぬといふ事があり若いといふ事があれば年取るといふ事があり、植物などでも青々とした草木が枯れるといふ事があり、爛漫と咲き亂れた花は散るといふ事があるのであるから、生物の變化はいかにもその通りであるが、例へばダイヤモンドといふやうな固くして尊び品物になると永劫不變で、何萬年経つても決して滅す

る憂ひもなければ、消える心配もないであらうと考へる人があるかも知れぬが、それとて、外界の空気に觸れてゐる以上、眼に見る事のできぬほどでも先に所謂物質物の變化即ち化學的并に物理的變化が行はれてゐるものであつて、何千萬年の後までも今のまゝのダイヤモンドの形で存在してゐるものでは決してないのである。そればかりでなく如何に立派なダイヤモンドでも金槌一つで叩き潰す事もできるのである。それ故吾々がいかに永劫不變のものであると考へるものでも、必ず變化といふ作用が行はれてゐるものであるといふ事は少しも疑ひを挟む餘地がない事に氣付かねばならぬ。

學者の誤謬

ところが不思議な事には十八世紀即ち今より二百年程以前に於ては、學者の間ですら、一般に種族の變化といふ事は信せられてゐなかつたもので、犬は昔から犬、猫は何十萬年の後までも猫といふやうに、劣等なる一つの種族

ダーウインの發見

から一步高尚な種族に進んで行くといふ事は誰しも考へずに居たものなのである。その當時有名であつた和蘭の植物學の大家リーネその人でさへ、種族は一定不變なものと同く信じてゐたものである。

然るに第十八世紀の末葉に至つて佛蘭西にラマ르크やキユヴィールの如き大家が續出して、學問の上から種族の上にも變化が行はれてゐると説くやうになり、第十九世紀の初めには英國の大地學者ライエルといふ人が出で地質學の研究の上から生物の進化といふ事を立論した。有名なるダーウインはその後をうけ世にも名高き動物進化の大原理を喝破したのである。

その著「種原論」

その學説を公にしたるダーウイン氏の著書「種原論」は生物形態學の比較研究、發生學上の諸研究及び化石學上の研究より種々の事實を捉へ來つて種族の進化を立證したもので、世にこれを動物進化論と名づける事は一般の能

無生物が生
物を生育す
る

く知る處である。以來五十餘年、その内容に多少の變遷はあつて、進歩改革の跡亦見るべきものがあるけれども、生物の進化といふ事は一般學界の承認する處であつて疑ふべからざる事實となつて居る。

さて然らば無生物界には一體如何なる現象が行はれてゐるのであらうか、この世界に於ても同じく變化の事實を認める譯には行かない。物理學や化學はこの事實を研究するために生れた學問である。遠い實例を擧げるまでもなく、吾々の棲息してゐる地球は、その實質は全く無生物から出來てゐるのであるが、多年一般學界によつて承認されてゐたカント、ラプラス兩氏の有名な宇宙開闢説によれば、わが地球はもと星雲と稱する非常に高温の瓦斯體から變化して現在の状態となつたもので、人類を初めあらゆる生物が生育する事ができるやうになつたのである。それ故無生物界も亦時々刻々に變化し

變化と進化

佛教と萬有
の意義

三法印と萬
有の意義

つゝあるのであつて、生物繁榮の立場からいへば、その變化の目的は進化發展にあるといはねばならぬ。

以上によつて此を觀れば萬有の意義は明かに變化であつて、その方向は進化である。即ち萬有の目的は明かにそれ自身の向上發展にあるのであるといふ事は赫々たる自然界の事實、宇宙の大道であつて、聊かも疑を容るゝ餘地はない事となる。

右は學術上の智識から萬有の意義を探究したのであるが、次に佛教の見地からその意義及目的を推究して見やう。

佛教と外教とを區別する爲に用ひらるゝものは三法印の教説である。諸行無常、諸法無我、涅槃寂淨がそれである。法印とは佛法としての旗印といふ事であつて、諸行無常といふ事は佛教の根本的原理となつて居る。諸行とは

萬有といふ事であり、無常とは變化といふ事である。それ故佛教でも同じく徹頭徹尾萬有變化の事實の上はその教理を組立て、居る。そして草木國土悉皆成佛は大乘教の理想であつて、萬有變化の目的は同じく進化である。淨土教でも矢張り諸行無常を土臺として、その上に十方の衆生を悉く成佛せしめるといふのが彌陀佛の本願である。變化を三千大千世界の眞理と認め、進歩向上を理想と説く點に到つては前の學術的探究の結果と符節を合するが如く同様の結果を齎すものである。

刹那生滅論

尙佛教には生滅遷流と談じ、輪廻轉生と説いて萬有の變化を説明して居る生滅を説く中最微巧妙を極めてゐるのは刹那生滅論である。即ち萬有は刹那々に生じ滅すると説くのである。然らば刹那とは如何なる長さの時間を指すのであるかといへば、毘婆沙論には晝夜に六十四億九千九百八十の刹

科學と宗教との相違

那があると説いてゐる。それ故是を十萬一億として計算して見るに六百四十九萬九千八百の刹那は一秒時間に約七十五強の刹那があるといふ事になるのである。然るにその一刹那の間に尙百〇一の生滅的變化が行はれてゐるといふに至つては、佛教の所説の周密幽微なるに驚かざるを得ない。

變化發展が宇宙の眞理、萬有の意義であるといふ事について、右述べたやうに現今の學術的推究と佛の説く處と一致して居るのであるが、宗教としての佛教と、學問としての科學とは自ら何等か異なる處がなければならぬ。何とならば宗教の領分は各人各個の魂の問題であり、科學の範圍は吾々の頭の上の問題である。つまり科學では萬有の變化、進化は宇宙の原則であるといふに止まつて進化の最後は何であるかといふ事を知る事はできない。即ち客觀的、相對的に萬有の進化を説明するに止まり、最後の歸着點を教ふる事は

できない。然るに佛教に於ては諸行無常の上に諸法無我をとき更に涅槃寂靜を説いて吾人の方向を明示して居る。即ち客觀的考察の上に主觀的、絶對的の探究を敢てして、吾々人類否萬有の歸着する處を道破してゐる。

それ故唯だ學術的に萬有の意義目的は向上進化にありと説明した處で、それで萬有の眞意義を擱んだものと云ふ事はできない。眞の意義如何といふ事になるとどうしても佛教の所説の如く、主觀的に諸法無我を説き、絶對的に涅槃寂靜に迄説き及ばさねばならぬ事となる。これ佛教が宗教として學術の上に超絶する所以であつて、宇宙の眞意義は佛教の説く處に至つて初めて圓滿に顯現せられ、赫々たる光明と、昱々たる生氣とを感得する事ができるのである。

尙この事を詳しく云つて見るにらば、萬有は變化すべきものである、若し

學術に超ゆる宗教

自覺の眞境

くは萬有は變化しつゝあるものであるといふだけでは、人は死すべきものであるといふ冷靜なる理性の一鐵案を下したに過ぎない。進んで萬有一體の意を彰はすに及んで萬有の個々物々に對して、同情慈愛の情味が湧き出てくるのである。尙一步を進めて涅槃寂靜の絶對界は生滅遷流止む時なき相對界に即して、時間的並びに空間的に無量無邊にして而も常住不變湛然寂靜なりといふに到つて、初めて安慰歡樂の眞境に住し、萬有中に横はるわが六尺の體軀は萬有の個々物々と共にその歸着する處に向つて突進しつゝあるのであるといふ自覺に到達する事ができる、眞心徹到といひ、大悟徹底といふ、共に這般の消息を語るに過ぎぬ。故に吾人は道破す、萬有の眞意義は進化向上にある、個々人類の目的は涅槃絶對の寂靜界にあると。

動と静

現代人の要求

汽車よ、電車よ、自動車よ。電信、電話、飛行機といふやうに、現代文明の利器と呼ぶる、流行兒は一つも残らず動くといふ事がある。その生命である。そして最も巧に、最も速早く動く事のできるものは益々珍重せられ、動きの鈍物は時代おくれとして、どん／＼現代から忘れられて行く。して見れば現代人の中心から要求して居るものは云ふ迄もなく動くといふ事である。

然るに實際のところ動くばかりで世の中は治まつて行くものではない。追ひ分け道に立つ地蔵はいつまでも動いてくれない。若しか地蔵が動き出して、暗夜を通る若い娘の袖を引いたら世の中は大ききわぎとなつてくる

動と静とは

であらう。否田舎道に立つ地蔵様ばかりでなく、現代交通機關の流行兒達も汽車が東京驛から馬關まで走り、走つてしまつては途中の停車場の人々は呆氣にとられるであらうし、飛行機が飛んではかり居ては操縦員の腹は乾ぼしになつてしまつてであらう。動くといふ事、停まるといふ事、この二つの事實があつてこそ世の中は圓滿に治まつて行く事ができるのである。動と静、静と動、浮世の面白味はこの間にある。

動と静とは相対的

物理学でも同じ事を云ふ。即ち動は積極的、静は消極的、動と静とは相關語として用ひられて居る。動静相對する處に、動は動として意味をなし、静は静として意味をなすのである。空間に存在するあらゆる點の中からたゞ二つの點を選び出し、ある一つの點が他の一點に向つて、一定の時間内に位置を變へる場合に於て、ある一つの點は他の點に對して動であり、他の一點は

物理と座禪

ある一つの點に對して靜である。例へば道行く子は附近の樹木家屋から見れば動であり、樹木家屋は予から見れば靜である。太陽と地球との關係についても同様、晝夜自轉しつゝある地球は太陽から見れば動であり太陽は地球から見れば靜である。つまり地球から見れば太陽はいつくまでも動かぬやうに思ふ。然るに太陽は自己の軸を中心として、凡そ二十五日に一自轉するが故に太陽も亦自己の軸に對しては動であり、その軸は靜である。それで太陽の軸こそ眞の靜であるかといへば決してさうは行かない。太陽はハークユレ一星宿の方向に向つて太陽系全體として動きつゝあるのでハークユレ一星宿に對しては矢張動である。

修養の種地

あるかといへば、是亦更に大宇宙の中心に對しては矢張動であつて、決して眞絶對の靜ではない。かく考へ來れば宇宙は擧げて動ならざるなく、随つて又靜ならざるはない。それ故動は靜に對し、靜は動に對して相對的關係にあるのであつて、絶對の動もなければ絶對の靜もない。即ち動といはるゝものも對するものによつては靜となり、靜と觀するものも對するものによつては動となるのである。「動中靜あり、靜中動あり」これ參同契中、支那石頭の希遷禪師が、坐禪悟道の方面から叫ばれた句であるが、移して以て物理學上の原則そのまゝなるに驚かざるを得ない。

人間活動の根本原則も亦この動靜の調和均衡に外ならない。若し動のみにして靜なくば、その動は輕舉盲動となり、靜のみを取つて動を顧ざればその靜は沈滯固陋となつてしまふのである。動にありて靜を忘れず、靜に居り

所謂奮闘所謂活動

て動を失はざる處に身心の動靜自在を得、動いて盲動ならず、静まつて沈滞に陥らずに進む事ができる。

精神の修養といふも要するにこの動靜の眞味に徹底するに過ぎない。トルストイ翁は「宗教は社會活動の源泉である、此源泉ありて始めて滾々たる日常生活を圓滿ならしむる事ができる」といふ意味の事を述べて居る。活動といふもその本源に溯れば湛然靜寂たる心源そのもの、問題であつて、近頃しきりに世人によつて叫ばるゝ奮闘主義活動主義もその本源たる心源涵養を忘れたものであるならば、それは吾々の用ひて却て有害なものである。

繪畫に於ける動と靜

動靜の調和について今少し各方面に互つて述べて見やう。先づ繪畫に就ては、その最も普通なものは山水であるが、山は静で水は動である。靜の山に配するに水の動を以てし、而も動の水と、靜の山とが釣合よく配された時、始

詩歌に於ける動と靜

めて山水の繪畫として吾人の興味を涌起せしむるのである。山のみにして水なく、水のみにして山なければ、如何に名工の作であつても完全なる藝術品として賞翫する事はできないであらう。

詩歌に就ても同様であつて、古來名吟と呼はるゝ詩歌には大抵其動靜が詠み込まれて居る。例へば彼の芭蕉翁の名吟「古池や蛙飛び込む水の音」なる名句に於て「古池」は静であり飛び込む蛙は動である。古池の静が静として未だ形を崩さず、蛙の飛び込む事によつて、動靜相對し其處に無限の興趣を覺えしめるのである。又詩に「鳥鳴いて山更に幽なり」といふ句があるが、普通の考へでは「一鳥鳴かす山更に幽なり」といつた方が、靜閑の趣を一層よく表はしてゐるやうであるが、その實決して眞の妙味を顯はす事ができない。即ち鳥の鳴くといふ動ありて、山の幽かなる様が躍如として偲はるゝのである

又「春山友なく獨り相求む、伐木丁々山更に幽かなり」といふ句にしても同様の事がいへやうし、又「さびしさは椎の實落つる寐ざめかな」などいふ句にしても森々たる椎の木から黒い艶々した椎の實がころり／＼と落ち來る處に動靜無限の妙趣を味ひ得るのである。

文學美術に於て吾々に審美の感を引きしめる事のできる者は緻密に觀察すれば悉くこの靜動相配の上に立つて居る事を氣附くであらう。

右はその精神的方面に就て動靜の妙味を述べたのであるが、この原則は物質的方面にも應用されてゐる、先づ一例を擧げるならば地震計などはその最も諒解のし易いものである。

現今日本は地震學の研究に就ては世界第一と稱されて居るが、地震の研究に於て、若し地面の揺れると共にその觀測物迄も共に動揺しては地震の觀測

地震計の話

はできない。そこで何處か一點不動の點を作り出さねばならぬ。若しこの不動の一點さへ攫む事さへ出來るなら、その一點を利用して地震は自由に計り得る譯である。

然らば如何にしてこの不動の一點を攫むか問題となつてくるが、現今行はれて居る方法では振子を應用するのである。その振子とは緞のない糸に重錘を下げたものである。この方法が用ゝられるのは糸に下げた重錘は、糸の長さが長ければ長い程振子の振動は少くなるものであつて、振子の支點は振動しても、長い糸の端に吊り下げられた重錘は振動しない。この理を地震觀測に應用して、精密なる器械を工夫したのが今日の地震計である。先づその原理を簡單に説明すると

重錘おもりに小さい棒ぼうでもつけてその先さきに針はりをつけ、その下したに煤すすを塗ぬつた紙かみを置く
 と、重錘おもりは動うごかないから従したがつて針はりも動うごかぬ。併しかし紙かみだけは地震ちしんに従したがつて揺ゆれる、そこで紙かみの上うへへ線せんが現あらはれ、それによつて地震ちしんの振動ふんどうと方向かうきやうとを観測くわんそくする事ことができるのである。



併しかしこれだけでは稍やや々そくそく複雑ふくざつな振動ふんどうになると、重錘おもりも一いっ緒しょに動うごいて、滅茶々めいちゃちゃ々ちゃになつてしまつてその目的もくてきを達たつする事ことができぬ。そこで如何いかに複雑ふくざつなる振

四種の振り

動うごであつてもその振動ふんどうに左右さゆうせられぬ振りふりを案出あんしゅつしなければならぬ事こととなる
 ところが普通ふつう振りふりとして考かんがへられるすべての種類しゆるいは四種類しゆるいである。

- 一、垂下振りすいかしんし 前まへに示しめした圖づのやうなものがそれである。
- 二、倒立振りたうりつしんし これは重錘おもりが上うへにあつて、支點してんてんが下したにあるもので、圖示ずしする



- 三、複振りふくしんし 二つ以上いじゆの振りふりを合あはせて工夫くふうしたもの
- 四、水平振りすうへいしんし 重錘おもりが支點してんてんと水平すうへいの位置いちにあるもの



平衡の三種

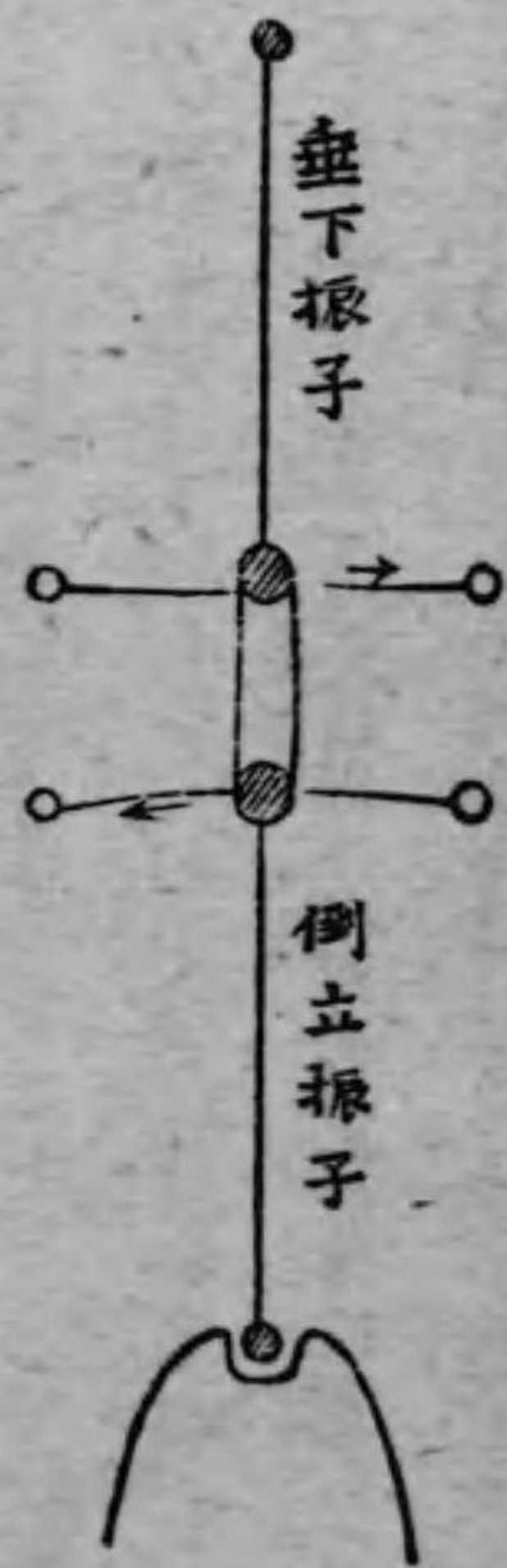
次に順序上平衡といふ事を話さねばならぬ。平衡とは普通所謂据りであつて、その据りはその度合によつて、三種に區別し得る。

一、不安定 重心が高い處にあるため動揺し易いものであつて、前の倒立振子の如きものである。

二、安定 重心が低い處にあるため、動揺の比較的少ないもの、即ち前の垂下振子の如きものをいふのである。

三、平氣 重心が中心にあるため、重心と中心とが常に一致の行動をとるものをいふので、例せば均質なる球の如きものをいふのである。球の周圍は如何に回轉しても、少しも重心はそのための動揺する事はない。さて完全なる地震計を得るには、如何にかしてこの平氣の据り即ち平氣の平衡を作らねばならぬ。直に想像のつくやうに垂下振子と倒立振子とを組合

せて複振子を作れば、それで目的は達せられるのである。即ち圖示せば次のやうである。



右の如く組立てられた複振子は、地震があつて垂下振子が右に動かうとすれば倒立振子はその反對に左に動かうとする。その二つの重錘はゴムで繋いであるために、二つの振子の振動が平衡して、少しも動かす居る事ができる。是が平氣の平衡である。

右の原理が今日の地震計に應用せられて、あらゆる地震が比較的精密に観

不思議な建
築(鐘樓)

測せられるのである。併しながらこれもある點迄の不動であつて絶対的不
動即ち眞の靜點はできない事は云ふ迄もない。

次に少し方面を換てこの平氣平衡について語つて見やう。即ち日本の古く
から存在する建築物中で、この垂下振子と倒立振子とを應用したものが二種
類存在して居る。その一つは鐘樓であり、他の一つは塔である。

鐘樓は四本柱の上に大きな屋根があるばかりでたゞその建物だけなら鐘樓
位危険な建物はない筈である。然るにその中央に鐘を吊してしまへばこれ位
安全な建物はないのである。即ち鐘樓は建物それ自身は頭が重いので倒立振
子である、そしてその中央に鐘を吊せば鐘自身は垂下振子であつて、鐘樓は
垂下振子と倒立振子とを組合せた至極完全な建物となるのである。それ故地
震の多い日本の國であつても、未だ地震のために鐘樓が倒れたといふ事は現

塔

今に於ても過去の記録にも殆どない。嘗て濃尾地方の強震の時も鐘樓の倒れ
たものは絶對になかつた事はその地方人士のよく知る處である。

塔に至つては、五重は尙更の事三重の塔にした處で、建物が高いだけに地
震に逢つては甚だ危険であるべきである。即ち表面から見た塔の建物だけで
は倒立振子となつて居るのであるから、少しの地震にも崩れさうに見ゆる。
然るに日本の塔には上層から下層に至るまで、中央に太い柱が一本ぶつ通し
に吊り下げられてある。この柱が鐘樓の時の鐘の用をなすのであつて、同じ
く垂下振子との組合の理によつて如何なる強震に遭遇しても、最も危険性の
少い建物たる事ができるのである。

大工の無智

然るに塔にして倒れたものがたゞ一つある。それは飛驒の高山にあつた國
分寺の塔で、今はその昔話が残つて居る。この塔は何故倒れたかと調べて見る

坐禪の工夫

と、徳川時代にある大工が、昔の者は馬鹿な事をしたものだ、この高い建物の柱を上から吊るすなどは危険千萬、宜しく柱を地盤から上に立て、塔の安定を圖らねばならぬと主張して改築したところ、その後間もなく地震の爲に轉覆してしまつたのである。即ち倒立振子のみの塔となつたからである。其後更に昔の通りに建て直した塔は今嚴然と昔の建築法の權威を示して居る。さて右に説いた物理学の原則を吾人の心の問題に移して考へて見やう。

禪宗で坐禪を工夫するのに、一旦は深山幽谷に退き静處に安居して、精神を練る必要があるやうであるが、眞の悟道に達するには決してこれだけでは足りぬ。即ち一旦安居したる深山幽谷を出で、市井の熱鬧場裏に來り動中静を得る工夫をしなければならぬ。「坐禪せば四條五條の橋の上行來の人を深山木と見て」といふのが禪の悟道の一端を云ひ顯はして居るに相違はない。即

平氣の平衡
と人生

ち銀座街頭、車馬織るが如き有様も達者の眼から見れば深山幽谷の樹木と何等選ぶ處はなくなるので、かゝる有様を詠じたのであるが、しかしこれではいまだ禪の階段を上りつゝある風情であつて、それに一段の工夫を積めば自動車は自動車、電車は電車、美人は美人とその各々のありのまゝを觀じつゝ精神に少しの動搖を來さぬやうになる。「坐禪せば四條五條の橋の上、往來の人をそのまゝに見て」といふのが眞の達處、達觀したる境地でなければならぬ。

吾人人生に處するに當りその最善の道は平氣の平衡を得るにある。即ち倒立垂下二振子の組合せによつて動亂多き人生に處して平然として進む事ができる。「人心これ危く道心これ微なり」とは倒立振子だけの人生を云ひ顯はしたもので、宿縁多幸にして若し確乎不動の大信念を獲得する事ができれば、

そこに初めて垂下振子が附與せられて、金剛堅固の不動點を得、日夜不斷に起り來る大煩惱中に處して平氣の平衡を得る事ができる。

つゝまる處倒立振子は貪瞋煩惱中の吾人自心である垂下振子とは即ち正覺成就の佛心であつて、若し信仰の紐によつて吾人と佛陀とを結ぶ事ができるなら、そこに眞極絶對の平氣の平衡を得、火宅動亂の巷に處して眞の靜處に安住する事ができるのである。

花と求道

花と人生

花の咲くといふ事は植物の世界に於ける最も不可思議にして而も美はしい現象であると共に、人生に對しても無限の享樂と慰安とを與へるものである

花の進化

「酒なくて何のおのれが櫻かな」といふが花なくしては酒の味も數等下る事であらう。兎に角百花爛漫とか、萬葉の花とか古來花を形容するのに、あらゆる美辭を連ぬるを例として居る處から見ると、花の咲くといふ植物界の現象がいかに人間生活に深き影響を與へるものであるかといふ事が知られる。

植物によつては全く花の咲かぬものもあるが、大抵の植物は花を開くのである。勿論美醜の程度はあるにしても、殆んどすべての植物は必ず花を開くやうになつて居る。

ところで花の咲く植物は、咲かぬ植物よりも進歩した植物であつて、地球上に植物の出でたる最初は原微植物として、バクテリアの如きものであつた。それから漸次種々の菌類が生じ、藻の種類が発生し、苗の類も顯はれ、進んでせんまい、わらびの如く羊齒類も出來て來た。それから著しく花の形を

花と求道

花の苦闘

顯はして來たのは裸子植物の類で松、蘇鐵、銀杏の如き顯花植物中の劣等なものがその初まりである。次には蘭、稻、萬年青の如き單子葉植物が生じ、更に進んで梅、桃、櫻の如き双子葉植物が現はれて來たのである。それで花の見えぬ植物を一口に隱花植物といひ花を見る事のできる植物を一纏めにして顯花植物といつて居るのであるが、隱花植物中の最下等なものから、顯花植物中の最上等の物に迄進む爲には吾人の想像も及ばざる長の年月を経て來たものなのである。一枝の櫻は何の氣なしに見れば、夜半の嵐に散る花であるしかしながらそのかよわい櫻として吾人の翫賞を受くる迄には、少くとも過去數千萬年の苦心が、その一輪々々の中に刻まれてあるのである。

吾人が愛翫する花なるものは、右に述べた如き無際限の苦闘を経て來たものであると共に、花の開くは開くべき時に何の苦勞もなく開くのではない。

花時風雨多し

即ち北風膚を劈く三冬は、花は開く爲の準備に最も忙しい時期であつて、その根に、その幹に莖に充分の用意を整へるべく、艱難辛苦を忍びつゝあるのである。

然るに一陽來りて百花は爛漫として咲き亂れる頃になれば、花の苦心はもう終結したかといへば決してさうでない。昔から「花時風雨多し」といつて、一夜の嵐すら花の姿を臺なしにしてやらうと待ち構へて居る。

かく觀來れば花は花たる爲に過去數千萬年の苦闘をついけ、花たるに及んで秋冬の寒苦を凌ぎ、更に花咲きて風雨の爲に惡戰苦闘を経なければならぬといふ事になる。即ち吾人をして年中の最も陽氣なる心に導き、樂天の境地に引き入れる力を持つた姿は實に右の如く、それ自身に於て苦しみに満ちたものである。

努力の求道

道を求めるといふ事も花の咲くと同様、決して並大抵の努力ではその目的を達する事はできない。古來の修行者が三僧祇百大劫の長年月を経て、漸く如來の位に上り得ると觀じたのは至極最もな言ひ分であつて、原微植物が進化して、菊や牡丹のそのやうに美しい花となるには無慮數十數百萬の年月を閲したより以上の長年月間の努力が必要なのである。

容易の求道

親鸞聖人が聖道、淨土の求道の難易を強く主張せられたのは此點に存する即ち聖道の修行門で行けば少くとも三僧祇百大劫の年月が必要である。然るに淨土易行他力の教に依るなら、「一念とは信樂開發の時剋の極速を顯はす」であつて聞信一念の曉に我々の求道が一段落を告げ、所謂正定聚の輩となるのである。例へば一枝の牡丹の花は豎に進化の歴史を溯れば數千萬年の苦闘を経て來て居るけれども、横に牡丹の花を見れば、牡丹自身は原微植物

でもなければ、隱花植物でもない。即ち去年咲いたと同じ様に牡丹の幹には牡丹の花が咲くのである。

吾々自身は求道に就ては殆んど骨を折つた覚えはない。否骨を折つたに似た處で吾々一生五十年の事である。然るに盡過去際の曉に於て、如來一人發願し、修行して吾々の求道に成り代つて下されてある。それ故吾々自身は隱花植物とも、原微植物とも例へやうのない不仕末極まるものであるけれども、宿善開發して、一念佛智に歸入する事ができれば、直に牡丹の花のそのやうな圓滿な花となる事ができる。頓極頓速とか横超とかいはれるのはこの味ひである。

花の教へ

わが佛教は一面に於て花の教へである。大聖釋尊が成道第一に説かれたお經は華嚴經であつた。又その終りに説かれたお經も同じく花を一部の標題と

した法華經である。日本佛教も奈良朝時代は華嚴經に依られ、平安朝時代に於ては法華經が重んぜられた。尙又我が眞宗に於て根本正典として用ひる大無量壽經にも佛の出世に逢ひ難き事を靈瑞華の如しと説かれ、上巻終りに於て又風吹散華以下の一段に於ては花の形容が誠に美妙に出来て居り、觀經、彌陀經等にも同じく花に對する美しい憧憬の情が顯はれて居る。若念佛者、當知此人。是人中芬陀利華が其結論である。禪宗に於ても拈華微笑の故事があつて梵天が釋尊に献上した華を釋尊が拈つて居られたのを迦葉が拜見して釋尊の眞意を汲み、以て禪の悟道に達したのである。その他多くの經論釋には花を引用してないものは恐らくないといつてよからう。殊に天台の智者大師が本迹二門の説明に用ひられた華落蓮現などの譬喩はその巧妙なる點に於て古今獨歩とせられてゐる。

人中の芬陀利華

春と求道

「春は花いざ見にごんせ東山」春は花の世界であると共に、春は求道に縁の多い時機である。親鸞聖人が「あすありと思ふ心のあだ櫻夜半に嵐の吹かぬものかは」の名歌を残して佛門の人となられたのは御年九歳の春であつた。又吉水の禪房に於て、法然聖人の教化を聞き、たちどころに他力攝生の旨趣を受得せられたのも同じく建仁元年の春であつた。法然聖人の出家得度も久安三年御年十五の春であり、嵯峨の清凉寺に參籠して求法を念せられたのも二十四歳の春であつた。愈自力の教をさし措いて淨土門に入られたのも承安五年の春であり、一宗の根本正典たる選擇集を著されたのも春であつた。かくわが淨土門と春とは大なる關係がある。實在は常に同一の形を取るものであつて、吾々求道者はこの花の春にめぐり逢ひながら、自己永生の一大事を疎かにしてはならぬのである。花の開くは人生の最も優美なる現象であ

人生最高の權威

花と求道

ると同じく、求道それ自身は人生に於ける最大の權威でなければならぬ。

宗教に縁ある植物の話

基督教と月桂樹

宗教に關係ある植物といつても、仔細研究し調査したら、その數多く、従つてよほど面白い問題が澤山續出する事であらうと思ふが、今はそんな綿密な研究ではなく、ふと思ひついた考へを少く述べて見るだけに止める。先づ基督教に一番縁の深い植物は月桂樹であらう。月桂樹は既に諸君の知つて居る通り、常緑の喬木であつて、高さ三丈位から五丈位迄延びる。幹から出てくる枝も枝から出てくる葉も、共に互生して居て、非常に行儀の正しい樹である。葉は頂邊が尖つて居て、その葉の面は濃綠色に光つて居る。花

神の靈の宿る樹

は黄白色で、葉の脇下ともいふべき處に密聚して咲く。果實は桑の實のやうな形をして居て、葉と共に香料に使はれる程芳しい香を持つて居る。この月桂樹が基督教徒によつて如何に利用されて居るかといふ事も詳しく述べれば限りはないが畫家の畫いたキリストの肖像を見ても、月桂樹の葉を糸で綴つて、頭から身體へかけてだらりとぶら下げて居る。基督が生きて居る中、いつもこんな事をして居たかどうかは知らぬが、肖像畫家がキリストと月桂樹とを結びつけたのは、確かにギリシヤ古代の月桂冠によつたものなのであらう。即ち競技などで優勝したものへ、月桂樹の枝や葉で作つた冠を與へて、その功勞を讃表するのである。是はこの月桂樹には古代ギリシヤの神であるアポロ神の靈が宿つて居ると迄、ギリシヤの國民に持囃された樹であつて、これをキリストと結びつけ、基督教と結びつけたのは先づ人情

神道と神

の然らしむる所といつてよからう。とに角そんな歴史の見地から観察しないでも、月桂樹は一見して正義とか勇氣とかいふ進取的な氣分を漲らす樹である。

次に神道と最も縁の深いのは榊である。神壇の裝飾に用ひたり、玉串につけて神前にさゝげたりするのは人のよく知る所である。この榊も前にいつた月桂樹と同じく、矢張常緑樹であつて、光澤ある深緑色の鋸葉である。緑白色の小さい花を開いて、紫黒色の小さな果を結ぶ事も諸君の知らるゝ通りである。

この榊が何故に神徒の裝飾や玉串に用ひられるやうになつたかは一寸今調べにくい、常緑樹の全體を總稱して榊と呼ぶ場合があるのにも見ても、いかに榊が常緑樹としての代表的な性質を備へて居るか、理解されるであらう。

佛教の標

又榊といふ字は木偏に神といふ字を書く所から見ると、すつと以前から祭神の用に供せられて居た事の了解ができる。勿論この字の起源から調べて見ねばならぬが、とに角祭神の用に供せられるやうになつたのは榊がいかに厳肅な清浄な心持を、見る人に向つて與へ、敬神の心を最もよく徴發する特質を持つて居るからであらう。香氣は月桂樹には及ばぬが、矢張清涼な匂ひを持つて居る。種類は既知のもの六種ばかりあつて、日本、支那、印度、北米、メキシコ、西印度、アンチレス諸島で見ることが出来る。

日本佛教と云つても切れぬ縁のつながれて居るのは標であつて、常緑樹で而して喬木であるのはどうした暗合なのであらうか。春夏秋冬一度も丸裸とならず、いつも元氣のいゝ濃緑色を湛へて居るといふことは、人間の壽命欲、生存欲を満たすための都合のいゝ表象なのであらう。高砂の尾の上の松など

と千代を壽ぐ材料とするのは、強ち日本ばかりではあるまい。基督教が月桂樹、神徒が榊、佛教が檜と揃ひも揃つて常緑樹と深い關係のあるのはいかに面白き事ではないか。

檜の葉や枝が互生して居て、香氣あり光澤ある點、及び黄白色の花を開く事は月桂樹と同じであるが、檜に相對した時の心持は、月桂樹と全然趣きを異にして居て、どこもなく暖かく包容的な感じを與へる。枝や葉に芳香を貯へて居て、それが香料の用に供せられる事も月桂樹と同じであるが、たゞ一つ大に異なつた點は、果實に恐るべき猛毒、即ち Strychnin といふ水に溶解せぬ結晶體の毒素を含んで居る事である。

香を聞くといふこと

私がこゝに述べやうとする話の主題は主として檜の事であるが、その前に今少し述べて置きたい問題がある。それは上述の三種共常緑樹であるとい

ふ事の外に三種共に芳香を含んだ樹であるといふ事である。宗教的本體即ち對照の本質をなるべく普遍的に表徴せうといふ目的から偶像又はこれに類する裝飾を用ひるのであるが、偶像は眼の感覺に訴へやうとするので、それだけでは物足らぬといふのもあらうか、鼻の感覺で以て、その表徴を補つて行かうといふ、無意識的又は必然的な要求がかうした香樹を選択した原因の一つであるのではあるまいか。昔の雅人は「香を聞く」といふ言葉を作つた位で、これが上流では可成り盛に流行して居たのであつて、「香を嗅ぐ」といはぬ所が面白い。即ち嗅ぐといふのは、單純な而も疎動な感覺であつて、高尚優雅な芳香の香は決して鼻覺といふやうな幼稚な感覺ではその味を知る事ができぬといふ考へから香を聞くといつてしまつたのであらうと思はれる。音樂の中に無限の意味を見出す事のできるやうに、香の中にも亦悠久なる生

眼と耳、意味と直覺

命が見出し得るといふ思はせふりな言葉の使ひ方であつて、鼻覺よりも一級進めて、耳覺に訴へやうとした所に興味がある。

それで基督教の月桂樹、神徒の榲、佛教の檳は、各目に好き常緑樹を選んだといふだけでなく、鼻にも否耳にも好い香樹を選んだといふ處は、人間の眞心がそのまゝに流露して、天真にして爛漫たる、人情の機微が含まれてある。同じ眼覺にしても文字と實物とは、各異つた物を教へるやうに耳覺も言葉と香りとは同じく同様の關係がある。文字が意味を教へ、實物が直覺を教ふるなら、言葉が意味を教へ、香が直覺を教へると云ひ得るであらう。眼と耳、意味と直覺、これやがてわれらが無窮の生命に到達すべき道として與へられたる偉大なる賜であるのではなからうか。さればわれらは耳と眼とが與へる知識を大切に取り扱ひ、耳と眼とが與へる直覺に充分の注意を拂ふ事を

蓮華の代りに糖

忘れてはならぬ。

さてこれから糖のことを話す。先にもいつたやうに糖は葉や枝は香料となる位糖かな樹であるのに、果實には SIKIMIN といふ猛毒を貯へて居る、子供などが糖の果實の一つを噛んだら、恐らく一命は覺束ない位多量の毒を含んで居る。こんな毒を含む果を結ぶ糖を何故佛前に供へるかといふと、密規即ち眞言宗の云ひ分では、果實の形が蓮の花に至極酷似して居るから、印度のやうに蓮華を供へたくても一年の大部蓮華のない我日本では、この糖の枝を折つて蓮華に代用するのであるといふのであらう。

大覺世尊の理想の花

蓮華といへば直に佛を聯想し、佛教の祖國は印度である。印度で蓮華が花の王として尊ばれたのは、歐洲で薔薇、支那で牡丹、日本で櫻が花王として持て囃されるのと對比して、國民思想に關する面白い觀察も出来るのであつ

て、否既にそんな意見を發表した人は決して二人や三人ではないと思ふが、
 兎に角蓮華が天竺即ち昔の印度で幅を利かして居た事は一通りや二通でない
 禪宗の拈華微笑の華も、天台の妙法蓮華經の蓮華も、華嚴の華も、皆共に蓮
 の花、即ち天竺魂の代表的植物は、日本魂の山櫻と同じく貴人高士さて
 は大覺世尊の理想の花、愛好の花であつた。禪、天台、華嚴の諸經にその中
 心となつて居るばかりでなく、今日各宗の根本聖典としての御經に蓮華の出
 て居ない御經は先づないといつて過言もではあるまい。

青黄赤白四
種の蓮華

櫛の果實が蓮の花の姿に似て居ると云ふのは眞俗佛事論第二卷に出て居て
 「櫛の實はもと天竺より來れり。本邦へは鑑真和尚の請來なり。その形天竺
 無熱地の青蓮華に似たり。故にこれをとりて佛に供す」と云つて居る。こゝ
 に青蓮華といふのは、Upala 即ち優鉢維華と音譯されてある、青色の蓮華で

ある。日本では赤か白かの花に限つて居るのであるが、印度では四色の華を
 見る事ができるといふので、Kumada (拘物頭華) 即ち赤蓮華、Padma (波頭
 摩華) 即ち黄蓮華 Pundarika (芬陀利華) 即ち白蓮華で、その中白蓮華を最も
 尊び、觀經などでは人中の芬陀利華と説いてある。多くの色彩中この白色を
 最も尊重するのが強ち印度特有の思想といふではなく、今日の文明國人の通
 有せる思想であつて、これ亦随分研究に價する問題であらうと思ふ。

前に引いた佛事論によると櫛を日本へ輸入したのは鑑真和尚だといつて居
 るが、今日櫛を佛の前に供して裝飾に用ゐて居るのは、本國の印度よりも、
 傳播國の支那よりも、媒介國の朝鮮よりも、その殿に榮えた日本である。
 今日では既知のもの十二種類ほどあつて、その中のどれを齋したのであるか
 は一寸明白でないが、日本、支那、印度、北アメリカに産出する。それでア

お華までも
持つて來た

宗教に縁ある植物の話

アメリカ人が佛教を信じてもさしづめお華に困らぬ譯であるが傳來者たる鑑真和尚は、もと支那の揚子江陽縣の産で、弟子一百八十四人を召しつれ、日本に渡來し南海佛教の大貢獻者である。六度までも日本へ渡航を企て、漸く六度目に日本へ來る事ができ、日本へ着いた時は渡航中瘴氣に逢つて眼を失して居たといふ。この霸氣に満ちた鑑真が、日本へ何のために櫂を持つて來たかといふと、矢張り佛前に供へるためであつたのであらう。日本へ佛教を弘めに來るのに、たゞ手ぶらで來ずにお華までも用意して來たといふ處はよほど注意周到な人であつたのであらうし、それが我日本に於て彼の使命を果した最大原因であつたのであらうと思はれる。

さて話の結末をつける事とせう。櫂の實は前にいつた通り猛烈な毒を含んで居るが、實の中の核は醫藥としても用ゐられるさうである。どんな病に效能

口と胃袋、鼻と肺

があるか知らぬが、とに角藥になるといふのである。又櫂といふ語源は「あしきみ」の略であるといふ説があるが、これも恐らく有力な説であらう。それで櫂の一枝をとれば、その中には妙なる芳香と、猛烈な毒素と、靈妙なる醫藥と三成分が攝在して居るのである。即ち葉や枝を火に燻べれば香料となつて心を樂ませ、別段肺を害する事もない。然るにその實は口を通つて胃袋の中へ入ると肉體に大害を與へる。そして實の中心となつて居る核は醫藥として萬人の病を救ふ藥料に満ちて居る。

三毒五欲芬陀利華

古來の佛者がこんな事を考へて佛前に供するのでない事は勿論であるが、吾々人間も深く考へて見るとこの櫂の一枝のやうに、微妙不可思議な動物であるのでなからうか。三毒五欲の惡人だとか、五障三從の女人だとか無有出離之縁だとか随分激しい攻撃を受けるかと思へば、一念發起入正定聚信決定

宗教に縁ある植物の話

の曉には人中の芬陀利華と賞られ、煩惱の林に入つて他を濟度する事ができるといふ。

不斷煩惱得涅槃。これはこれ佛前にあつて威張り散らす檜の一枝である。實にやわれらは檜である。しかしながらいまだ佛陀の救濟を受けず、信決定の人でないなら、佛前に立ちて香氣を放つ莊嚴となる事はできぬ。

三部經の中の動物の話

誰でも考へ
のつく事

三部經といへば三四卷もあり、字數句數も可なり多いのであるから随つて自然界がいろんな形をとつて出てくるのであるが、動植物の三つも出て居る數の上から比較して見ると、植物は至る處に見る事はできるのである

が、動物といふ段になると甚だ少數にしか出て来ぬといふのは、注目すべき
考究題目のやうに思はれる。

併しながら自分は今その比較考究といふやうな事をやる積りでなく、たゞ
ほんの管見を話すに過ぎないので、少し注意して拜讀すると誰でも考へにつ
く事なのである。

先づ大經の中に出て来る動物の種類をあげると、上卷では牛と象と馬と獅
子と龍とがその主なるものである。その外に鸞と珊瑚との二つがある。又他
に靈禽とか畜生とかいふ語は出てくるのであるが、具體的な動物の名稱とし
ては、先づ右述べた七種に過ぎない。その中で珊瑚は大經の當相では鐵物と
して取扱つて居るのであるが、やはり動物と見ることが出来やうと思ふ。
不思議なことには下卷に來ても、上卷と同じ種類の動物が出て居るので、

動物から見
た上下二卷

一讀して了解できるやうに矢張牛と馬と象と獅子と龍とがその重要にして、明瞭なもので、その外に金翅鳥といふ鳥類の名前と、蠕動の類といふのが出てくる。

それで上卷の五つが下卷にも出てゐて、上卷の鷲が下卷の金翅鳥に對し、上卷の珊瑚が、下卷の蠕動の類といふのに對向するものと見れば、上下二卷の大經は動物の方から見ると全く同様の形式で「イキモノ」が出てくる事になるのである。

降つて觀經へ來ると、大經の中の初めの四種が形を潜めてたゞ龍だけ残りその外に鷹と鳧と鴈と鴛鴦とが出て居る。上卷の珊瑚も同じく觀經に出てゐるが、これは先にいつたと同じ意味で、動物と見なくてもよいと思ふ。そこで觀經の動物の主なるものは、空中を飛ぶ事のできる鳥類と、雲を住居と

大經は哺乳類
類觀經は鳥類

進化論の考
へる事

する龍とだけが残つて、地を匍つてゐる四つ足類の動物は一つも出て居らぬといふのは偶然とは云へ不思議な現象でないか。

そこで動物の配されてある方面から、三部經の中の大觀二經を達觀すると先づ大經は哺乳類の經典といふ事になり、觀經は鳥類の教へとなるので、兩部を結びつくるものは龍といふ奇妙な動物一つである。

地質學では哺乳類は地質時代の第三、中生代の初期、即ち三疊紀にその形を顯はし、鳥類は同じく中生代の中頃、即ち侏羅紀に初めて出現したと説くのである。ところが哺乳類が哺乳類として存在した時代には、猶鳥類は勿論存在して居なかつたらしいが、しかしその時代は鳥類は爬虫類と鳥類との合の子、強て名づけるならば爬鳥類とでもいふ形で存在してゐたのである事は確かだ。

右のやうにいつたところで、まだ進化論の所説に耳を傾けぬ人は或は理解できぬかも知れぬと思ふので、その事を少し説明しよう。

動物たる以上は必ず生殖の機能を持つて居るので、よほど繁殖の鈍い動物であつても、他の障害さへなければ、数年の後には数百千の數に増加する事ができるのである。然るに限りある地球面は無數無限に増殖する動物に向つて、思ふまゝに食料を與へる事はできない。地球面それ自身としては、勢ひ彼等のなすがまゝに放任しておくより外に仕様のない事となつてくる。それで各動物間に食料の奪ひ合ひが始まり、兄弟鬩に争はねばならぬ事となる。先にいつた爬虫類についていつて見るならば、他の異種類の動物を殺して自分達の食料とするに止めず、自己と同様即ち爬虫類同志が骨肉を喰ひ合つても生命の安固をはからねばならぬ事となる。例へば一匹の「とかけ」は、他の

若し空中へ
逃げ延びた

種類の動物なり植物なりを喰つてゐては、到底自己の肉體を保存するだけの食物が得られぬ事となるので、自分達同志がお互に正當防衛の道を講せねばならぬといふほど、生存上の競争が劇烈になつてくるのである。今述べた鳥類ともつかず爬虫類ともつかぬ、所謂爬鳥類といふやうな合の子は右のやうな事情で、進化的に出現して來たものなのである。

尙具體的に今少しく説明して見やうなら、例へば一匹の「とかけ」は、自分の生命が欲しいなら、如何にして食料を得るかといふ事以上に、如何にして他の侵略を防ぐかといふ積極、消極両面の努力が必要となつてくるものであるから、而も他からの侵害が猛烈を極めるといふ事を自覺した場合に翻然空中を仰いで長嘆息し、あの空中に逃げのびる事ができるなら、誰よりも安全に而も美味なる食料を見つける事ができるであらうかと考へるやうになつ

て、始終その事に心を用ひたとすれば、天は自ら助くる者を助くるの例にも
 せず、遂に一双の翼が興へられたとする。かうなれば「どかけ」はもう「どか
 け」ではなく、立派に空中の王となり済まして、地上に腹這ふ動物を見下し
 て「コ、マデオイデ」と得意の音聲を叫ぶ事ができる。この聲にそゝのかされ
 地上の弱虫連中は皆空へ〜と苦心するやうになつて、さて鳥類といふ一種
 の固定した動物が出来上つたといふ様に説くのが進化論の大體であつて、吾
 々が美味い美味いと喜んで食つてゐる鳥の肉は豈計らんや、その實もどを質
 せば蛇や「どかけ」の肉を食つてゐる事となつてしまふ。蛇や蜥蜴が鳥と同じ
 形の卵を生むのも進化論者にとつては有力な證據を興へるので、鳥の卵を
 食ふ人があつても、蛇や蜥蜴の卵子を食ふ人の居らぬのは、人間は要する所
 眼によきもの、耳によきものを先づ戀ひ慕ふといふ蛇や、「どかけ」以上に御

本家の蛙、
支店の蛙

都合第一の動物であるといふのは進化論者に聞かせたら何と理窟を言ふ事であらう。

尙進化論の説く所では、爬虫類はまだ支店であつて、その本店は兩棲類であるといつてゐる。即ち兩棲類といへば蛙の類であるが、蛙が最古の老舗でその支店が「どかけ」であり、支店の支店が鳥類であるといふのだから、蛙家の發展は大したもので、成程支店の支店たる鳥家は文明の全潮流を吸収して水鳥といふやうな一族は天を翔ることもでき、地上を歩行する事もでき、水中を泳ぎまわり、くぐりぬげる事のできる便利重寶ないろ／＼の利器を使用して、全世界に顧客を有する最新式營業法を應用してゐるのである。それに比べて本家本元の蛙一族は保守的なる、僅に樹の葉に身を横たへて、あてにもならぬ雨を呼ぶのもしほらしい經營振で、その趣に捨て難い所のある

のは、矢張老舗の老舗たる處であるともいへやう。

加ふるに蛙類には保護色といつて、青蛙といふやうな一族があつて、支店の支店から啄まれるのを恐れて、木の葉と同じ色に装束して、一寸見つけ出されぬやうな始末な態度を取り、木の葉が落ちたら支店の蛇を恐がりながら支店の蛇の捨てた穴に逃げ延びて、漸く秋と冬とを陵ぐといふ時世は變れば變るもので、生き物にとつては「時」は恐るべきものはないのだ。

佛教は太陽の教へである

さて話を元へ返して、大經の上巻、下巻に出てくる牛と馬と象と獅子と龍のことであるが、初めの四つは先づ別に珍らしくもない。ところでこの四種は佛教では可なり面白く取扱つて居るやうに思ふ。即ち牛は法華經などに「大白牛車」といつて、牛に車を引かせてその上に大と白との二つの資格を與へてゐる。馬にも大經の當相からいつても「服乘白馬」であつて、釋尊を檀特

山送りとつけたものは白馬であつて黒馬やその他の毛色の馬でない。象についても同じで、普賢菩薩の召される象は必ず白象であつて、今日動物園で見るとやうな汚い色の象ではない。獅子に至つてはさすがに白獅子といふ取扱ひ方は少く、人口に膾炙して居る賢首の光明皇后の獅子は金の獅子である。金色といひ、白色といひ共に色中の王であつて、その色の王を、最も従順な牛と馬と象とに與へ、獸中の王たる獅子に、色中の王たる金色を以て配してゐるのは雄大といはうか偉觀といはうか、兎に角佛教はどこかに違つた所がある。太陽の光線は七色とは云ふものゝ、七色も快速力で回轉させれば白色となつてしまふ。而も吾々が太陽を直接に見れば、赤色、青色その他の色を連想せず、たゞ金色を想ふ。太陽は白色なるに非ざれば必ず金色である。佛教は太陽の教へである。大日輪の光明の如く、少くとも地球面全部を包む事ので

小經の動物

さる教へである。

さて小經に至つて、出てくる動物は鳥類の鸚鵡、舍利、迦陵頻迦の三つと哺乳類の獅子とであつて、大經は古來法の眞實を顯はし、觀經は機の眞實を顯はすと決擇してあるが、機法二種の眞實をあらはす小經に、大經の哺乳類を代表して獅子が頭角をあらはし、觀經の鳥類は鸚鵡にすべてを一任して小經の會座に參せしめてゐる所は、益以て微妙な快感を覺えしめる。

無限の進化

韋提希夫人が阿闍世王のために苦しめられ、最後に釋尊の説法によつて眞の安住所を見出したといふ事は爬虫類が地上の争闘に耐へる事ができず遂に空中に向つて自己の天地を見出さうと苦心したと同じ理由にある。彼の女は我が身の生んだ實子のために、獄中に呻吟しなければならなかつたので、「とかけ」に一双の翼が生じたのはやがて「とかけ」を救ふ唯一の道であつたやう

に、彼の女を救ふ唯一の道はやがて釋尊が救はれ給ひし稱南無阿彌陀佛の最後の解決であつたのだ。

「とかけ」を空中に飛翔せしむべき、生物進化の原則はたゞ六字にある。過去を盡し、未來を盡して「イキモノ」の心臓を通貫すべき利劍は、たゞ南無阿彌陀佛の外にない。

進化！進化！吾等は永久に進化しなければならぬ。進むべき利劍は十劫の昔に研かれてある。無限の向上は唯この利劍にのみよつて得られる。

讀經生活と腹布教

ある時侯は一人の青年から次のやうな質問を受けた。

ある青年の打ち明け話

「寺院に衣食して居る關係上心にもない讀經を強られるので、自分の常に理想として居る布教といふ事ができぬ。直接に布教するといふ事も、その布教に要する準備も充分に出来ぬ。朝から晩までお經を讀まされ通して、讀經といふ事から一步も出る事のできないのが自分の生活である。この通りではとても一生纏まつた仕事もできず、おめ／＼死んで行かねばならぬと思ふと、どうも内心苦しくてならぬ。何とかして現在の生活を立て直す工夫はないものであらうか。自分の身になつてそれを考へてくれ」といふやうな打ち明け話である。

讀經と布教との矛盾

この問題は現在の寺院生活の青年には可なり一般的問題である。讀經即ち儀式の執行と教義の宣傳との二つの異なつた形式から生ずる矛盾は現今の佛敎界に立つ青年の心を可成り強烈に苦しめて居る。それで僕はこの青年に

敎界に立つ決心

對して披瀝した僕の所信を語つて、他の多くの派内青年諸君のために多少の御參考ともし、又識者の方から御意見を承はりたいと思ひ立つたのである。

先づ初めに述べておきたいのは、多くの青年敎家は敎界に立つ以前に於て豫めこの二つの矛盾せる形式ある事を充分に心得ておかねばならぬと思ふ。そして身自らはその二つの形式の内、いづれに就いて生活すべきかといふ事に對して充分の決心を持つてかゝらねばならぬ。布教を主として立つか、儀式を主として立つか。この二つの内のいづれを選ぶべきかといふ事を自ら敎界の人となる以前に於て、充分決心しておく必要がある。若しこの選擇を誤つたならば、先に述べた青年のやうに何を目的として生きて居るのか、その敎界に處する態度が甚だしく不分明となつて、心もとない一生を送らねばな

實經主義

らぬ事となるのである。

儀式、否もつと適切にいふならば讀經によつて立つといふ事は、現今の有様では至極容易な事である。いふまでもなく年忌、月忌、さては報恩講などに必要とするお経が一通り讀めるならば、それで充分間に合ふ譯である。教行信證にどんな文字が書いてあらうと、七祖の主張がどうであらうと、お文の解釋、和讃の意義が何であらうと、そんな事には一向頓着なく、需要に應じて供給して行けばそれで事足るわけで、胸中何等の屈托もなかつた讀經これわが生活の全部と安心して進む事ができる。たゞ一時心配なのはお布施の額如何にあるが、それとてその地方地方で大抵定まつて居るのであるし、普通の商賣と異つて倒れといふものは全然ないのであるから、賣經先きを少しでも多く作つたものが勝となるのであつて、人によつては供給が需要に應じ

實經の安全

布教に要する苦心

きれぬで、もう二つも身體があつたらと考へて居る人もあり、反對にどうかしてもつと手を延ばさねばやり切れないと考へて居る人もあるであらう。

適當の賣經先きを持つて居る人が、讀經といふ一つを仕事として居るほど安心なものはないからう、少々社會的に不信用なことがあつても、さう大した反動をも受けずに、相當の生活が出来て行くやうになつてゐるが、現今の需要者大部分の頭であつて、それらの人々はたゞ讀經それだけを要求して居るので、讀經者自身の學も徳もそれらの事は先づ第二義的な問題として、あまり重大な條件とはなつて居らぬ。

然るに一方、布教によつて立たんとする人は、その種類によつて甚だ大なる菩提心を必要とする。布教といふ事を至極狹義の意味に解釋して、高座の上の説教ばかりと限つても、布教する人の精神如何によつては、大なる苦し

みなしには通過し得ない。現在多くの地方に於てよく行はれて居るやうに、たいお義理一邊に強られる説教であつても、人に稱讃せられたいといふ欲望がある限り、とに角人に感服せらるゝやうに相當の努力を拂ふ必要が起つて来る。そして少くとも宗學上の匂ひだけでも、嗅いで置く事が是非に必要であるので、子供や無學な人には出来る業ではない。然しこれも所謂諸誦説教で満足し、そして聴衆に何者をも與へる必要を感せぬならば、それは前に述べた讀經と殆ど異なる處がないのであるが、苟くもそこに何等かの主張があり、欲望があり、向上心があるなら、決して永久に間に合せの諸誦説教では本心の満足を買ふ事はできぬ、まして況んや説教の巧拙が、自宅の米櫃の底まで影響する人にとつては、先づ聴衆の心理状態を理解する必要が起つて来る。そして現今の説教制度のやうに同じ聴衆を相手に一日十二回も同じ高座

を上下して、それが一週間も続けねばならぬとなると、人知れぬ書齋の苦勞も必要となつてくるであらうし、寒い夜空に、浪花節の節廻しをどう自分の説教に應用するかといふ事を練習に人なき野原へ出掛ねばならぬ必要も起つてくる。

關 教家の大難

以上述べただけでも一通りの苦勞でないのに、三衣をまとふ責任上どうしても宗學の中心問題に觸れねばならぬといふ大難關がある。若しその人が正當の教育を受けて居らぬ人であるなら、尙一つ教師の列に参加するため、相當の試験を受けて本山の許可を得ねばならぬ。若しその試験に難なく及第しても、宗學の中心問題、即ち眞の信仰に到達する事ができねば、大手を振つて檀信徒の前を通過する事はできぬ。否説教者として生活するにはこの關門を通過しておかねば、どうしても所謂成功の布教者として尊敬せらるゝ事はで

きぬであらう。つまり一部少数の眞の信徒より來る侮辱を覺悟して居らねばならぬ。

この關門を通過するには、金剛の如き勇氣と決心とが必要である。つまり自分自身の魂に向つて衷心やましからざる解決が與へられて居らねばならぬ事である。

時代と教家

眞面目なる現代青年教家の胸には、如何にして布教せんかといふ方法上の問題よりも自己の魂を救ふべき形而上の問題が、その煩悶の中心となつてゐる。人を救ふ以前に先づ自身が救はねばならぬといふのが、現代青年教家一般の主張であつて、この難關を切り抜けるためには可なり大なる努力が拂はれつゝある。新舊思想のあまりかけ離れた現今に於て、一見舊思想と感ぜらるゝ宗祖の信仰を現代の思潮に養はれて來た自分の胸の中へ、どうして

咀嚼するかといふ事について、可成りの苦悶が拂はれて居る。否是非とも拂はるべきものである。

この解釋さへ得る事ができたら、それが直に眞の布教家として立つべき基礎が定めらるべきであるけれども、現今の宗學研究の歩調はその便宜を現代青年教家たるべき人に與へてゐない。是が非でも自己の努力で、少くとも自身の安心立命だけは處決して置かねばならない。しかし安んじて布教家として一生を托せやうと考へ、又は責任づけられてゐる人にとつては、若しこの解決が明瞭にできて居なければ、一生を布教に打ち込む事ができても、充分の効果を收める事はできぬであらうし、自分自身もごことなく靴を隔て、痒きを搔くの嘆に陥らずしては止まぬであらう、即ち布教家としての眞の幸福を味ふ事ができぬであらう。

宗教と經濟問題

現代青年宗教の布教に對する煩悶の根本は一に掛つて右の事情にある。次に來るべき煩悶は經濟上の問題である。即ち布教の根本義は報酬のためになすべきものでないといふ純精神的な處にその根柢を持つてゐる。

自己の生活を豊富ならしめ、家庭の物質的幸福を得るためには、どうしても職業、即ち收入の道を考へねばならない。これは純粹の布教家にとつてはまことに厄介な事である。眞面目な青年にとつては一席の講話又は説教の後紙に包んである。せよその報酬を受けるといふ事は、衷心からの感謝を捧げ得ぬであらう。信仰の披瀝はたゞそれ自身でありたい。報酬のための説教ではありがたくない。出来る事なら自身は一生買ひ殺にしてくれるものがあつたら、自分はどこまでも信仰運動に熱中する事ができるであらうと考へるであらう。冒頭第一に掲げた青年の苦衷は實に右に擧げた二つの至極最も矛盾

青年への返答

盾不調和から來て居ると思ふ。

僕はこの青年に對して大略下の如き答を以てした。「君はあまりに布教といふ事を狭い意味に解釋して居るのではあるまいか。君の煩悶は眞の布教といふ事を理解しないから起つてゐると思ふ。君が讀經生活を捨てるといふ事は現在の與へられたる布教の對照を失ふといふ事になりはしないだらうか。讀經そのものに布教の眞精神を吹き込む方法を取つたらどうであらう。

君は必ずしも口を以てし、聲を以てする事のみを布教の方法と考へてゐる若し布教の範圍がたゞそれだけに限られてゐるものであるとしたなら咄辯なものや、若しくは無學であつて信仰を確得して居るものは甚だ割の悪い事となるではないか。宗教の傳道は決してさる範圍の狭いものではなく、君がお經の讀み方にも、讀經先の家人に對する挨拶の仕方、物の言ひ方時間の嚴不

殿、その他一切の君の行動が、君の布教となる事ができるではあるまいか。つまり布教の眞諦は口の上にあるのではなく、身體の上にあるのである。腹の上にあるのである。芝居に腹芝居があつて、名優でなければ、眞の技倆が顯し得ないやうに、布教も却て腹布教の方が尊いと思ふ。今日宗教界の沈滞の原因は明かにこの腹布教を忘れて口説教、聲説教にのみ身をやつして居る人が多いからではないか。

君が與へられたる讀經生活は、明かに腹布教の立派な基礎であり舞臺である。君の熱望する布教は腹布教でなければならぬ。君は最後の勝利を腹布教に期して、堂々として進むべしである。」

青年と右の對話を交換してからは、可なりの年月が過ぎた、僕はこの青年の大體の性情から推して、僕の所謂腹布教に盡力してゐる事と信ずる。

讀經の意義

僕は事實如何ともし難き讀經生活と布教生活との矛盾を上へのべたやうな考へで調和しようとして考へてゐる。まことの信仰も確得せず、徒に高座の上に於て、舌三寸の動かしやうで多くの人々の魂の方向を誤らしめてゐる布教師の一人を捨て、讀經生活に甘んじて、而も信仰の眞諦を自己の一舉一動によつて傳へんとする所謂腹布教師の一人を取らんとするものである。讀經を一種の職業と見なす事ができるとすれば、この態度は明かに職業即ち傳道であつて、決して二重人格でない。職業は神聖なりてふ言葉に若し眞の動かね眞理が潜んで居るなら、讀經そのものは飽くまでも神聖である。而も一言一句自己の臆説を交へず、佛の獅子吼を獅子吼し、聖者上人の赤誠を吐露し給ひたる言句をそのまゝ、腥き自己の唇を通じて再び誦する事に無限の意義があるではないか。

僕は繰り返して云ふ。今後の布教問題は口の上にあるのでない。聲が唯一の武器でない、滔々として止まる處を知らぬ現代の大缺陷を救はんがためには何者も動せぬ腹の問題が最初である。

青年と斷行力

青年たる特性は勇氣にある。年が若くても青年といふ事はできない。たとへ百歳の年を救へても勇氣さへ失はなかつたならば、青年と呼ぶに躊躇しないのである。

勇氣の有無は斷の一字によつて知る事ができる、斷あるものは勇あるものであつて、隨つて青年である。或る人乃木大將に向つて揮毫を請ふた所、「よ

乃木大將の
一家言

しおれの一家言を書いてやらう」といつた。どうせ乃木大將の事だから、忠孝とか、忠義とかいつた文句だらうと思つて控へて居ると、出來上つたのは「熟慮斷行」の四字であつたとの事である、又中江藤樹先生の處世のモットーは直進無避の四字であつた。温厚な君子と見られた藤樹先生もかゝる強烈なる處世の秘鑰を握つて居た。

元氣の興味

陸軍幼年學校などで非常に面白いと思つたのは、學年試験の成績を調査して、進級の覺束ないやうなものは教官會議にかける。その節校長は各教授の論議を黙つて聞いて居て、もうよしと思つた頃立ち上つて「何某何某及第、何某何某落第、會議終り」といつた調子である。その間何某何某は及第といたしますとか何とか彼とかいらぬ文句を使はず、たゞすつぱり及第とか落第とか一言でもつてその要を得てしまふ。かういふ所にいふにはれぬ面白味

青年と斷行力

謹慎を命ず

があるので、元氣を尙ぶ人でなければこの間の興味がわからぬ。
 尙一つ僕の興味を引いたのは、ある試験の時、試験終りの喇叭が二分間後れたのだ。生徒の中には随分永くまでかゝつて答案を認めて居たものもあつて自分の時計を見てもう時間が来たからと潔く答案を出したのもあつたが二三の生徒はまだ喇叭が鳴らぬからといつて喇叭の鳴る迄書いて居たものもあつた。その事が苦情となつて職員は喇叭手を罰せよと叫んだ。「それは最も千萬だ」といふので喇叭手どころか、中隊長あたりまで「其方儀監督不行届の廉あり仍て七日間謹慎を命ず」と来たものだ。こゝらは随分味ふべき所であつて、よほどの断行力が徹底して居なくては出来ない事である。

頃といふ時間はない

或時ある別院で土屋大將に講話を願つた事がある。その時時刻といふ事について随分大將自身の面目を躍如させた話がある。別院の方では二時に来て

くれと申し出した、大將はそちらへ二時に着けばいゝのか、こちらを二時に出ればいゝのかといふ質問である。別院の方では二時といふ觸れですが、二時には仲々全部集りかねますので、二時頃そちらを出て頂いて、二時半頃こちらへおつき下さいと答へてやつた。處が大將は向きになつて怒つた「僕の方には「頃」といふ時刻はない」といふのだ。何時でもいゝからはつきり何時といふ事をいへといふのだ。別院の方では大さう困つたさうであるが、大將は「宗教界にそんな馬鹿者ばかり集つて居るから、到底布教の成績が上らぬのだ。別院へ来る人々は汽車に乗つた覚えがあるだらう。別院の時刻は汽車と同じだと思へど何故さう常から知らしておかぬ。宗教の奥堂まで達せずともせめてかういふ所に教化の實を擧げたらどうか」といふのだ。最後に大將は例の口調で「考へて見い、五分といふ短い時間に騎兵がどれだけ走るか」

一秒時間を
六千萬

と附け加へられたさうである。
断後るれば時間を有用に費ふ事ができぬ。青年はこの呼吸をしつかり呑み込んでおかねば駄目である。青年の特性は、當つて碎けるでなくてはいかぬ腹の切り時が一分間後れたならば腹切り未遂となつて人の嘲りを受けねばならぬではないか。一時間といふ時間を六千萬の同胞に割りあてれば六千萬時間となる。一秒時間も六千萬積めば、六十九日十時間四十分となる。六千萬人總立となつて各自の信する所に猛進し、断行したなら必ず偉大なる結果を得る事ができるのだ。

得難い家來

本多平八郎といふ男は随分面白い男である。桶狭間の合戦の時、家康に乞うて僅か二千足らずの兵を得た。その兵で以て、秀吉の大軍に妨害を興へやうといふのだ。秀吉の軍勢は五萬六萬の大軍である。その大軍に横やりを入れやうといふのだから、秀吉の軍勢にとつては別に恐るゝに足らぬ事は勿論である。遠くから本多のこの舉動を見て居た秀吉は部下を呼んで「仲々面白い男だ、おれが勝たら彼を家來に抱へてやりたいから、彼及彼の部下をなるべく傷つけぬ様にしろ」といつて、いゝ加減にあしらつて通つた、軍が例の和睦となつて秀吉と家康とが會見した時、秀吉は「君の家來の本多といふ男は仲々元氣な男だ、君は得難い家來を持つたあれをよくいたはつてやれ」といつたさうである。龍車に向ふ蟻螂といふ事はよく解つて居ても、根のつゞ限り信する處を断行して行くといふ志は實に立派なものといはねばならぬ。

池田勝入の
話

尙同じやうな話がある。矢張桶狭間の戦ひに就てゝあるが、秀吉の家來に池田勝入といふ男が居た。秀吉は彼に命ずるに敵と敵との聯絡を探知する事

を命じた。然るにどうしたものか、家康と織田とは巧に聯絡を取つて居るのに勝入の方からは何の通知も来ぬ。秀吉は勝入を呼んで、家康と織田とがかくくして聯絡をどつて居るのに、何故お前はそれを己に報告せぬ。報告せぬのはこの事實を知らぬのであらう。お前は己の命を充分に守つて居らぬではないかと詰じつた。勝入は實際それを知らなかつたのだそれで勝入は自分の無責任をいたく感じ、且秀吉からの信任が一時に失はれた事を悔いた。勝入は何とかしてこの失敗を償ふやうな大功を揚げて、又元々通の信用を恢復しようどつとめめた。

勝入は非常な努力を以て家康方の敵情を探つた結果、家康は今岡崎を離れて濱街道を伊勢に進まふとして居る事情を知つて、家康の虚を衝て岡崎城を占領するから、秀吉の方からは家康の背後を突くやうにしてくれと申し出た

秀吉は先きの失態もあるので、初めの間は許さなかつたのであるが、勝入があまり執固く嘆願するものであるから遂にそれを許した。許しはしたが、一つの條件がある。それは「わき目ふらずに乗つ取れ」といふのである。勝入は信用恢復の時は今ぞと勇ましく出陣した。

途中家康方の小さな砦がいくつもある。勝入の考へでは家康が引き返して此處に到達する迄はまだ随分時間がかかるから、一つ軍の幸先を祝ふためにどうせとるにも足らぬ小さな砦の事であるから一つ攻め落して、首實験でもやつて見やうと思つたところから、その小さな砦と挑み合つた。砦は難なく落ちたが、急にその事を家康に報告したものがあつた。本陣を出て進軍の途中にあつた家康は、直にそれと悟つて、途を換へ、「何猪口才な」と逆落しに大軍を以て勝入の軍を攻撃した。思ひがけない不意打ちに、勝入の率ゐる軍は

算を亂して、敗れたばかりでなく、勝入自身も遂に敵手に當つて斃れてしまつたのである。この事を知つた秀吉は自斷駄履んで口惜がつたがもう取り返しはつかなかつたのである。

勝入にして勝手な行動をとらず、眞直に秀吉の命令を斷行すれば立派に目的は達せられ、随つて家康の軍を滅茶々に破る事ができたかも知れぬ。斷行には道草は禁物である。勝入の折角の努力も僅かの道草によつて遂に大功を立つる所か、自分の一命をも捨てねばならぬ事となつてしまつた。世の中に運だめしといふ事はあるが、信ずる事を斷行するに何の運だめしの必要があらう。

お手元拜見

無抵抗の砦を乗つとるには一小隊の兵で充分であるとすれば、その一小隊の抵抗ある砦を乗取には少くとも一大隊以上の兵が必要であらう、若こゝに

一つの砦があつて兩軍の距離が均等であるとするならば、率ゐる兵は少數であつても一刻も早くその砦に向つて突進したものが有利である事は論を待たない。要は機先を制するにある。人の太刀をいかにして受くるかを考ふよりもお手元拜見と切り込んだものが先づ勝を取るのだ。

さて時代は新しくなるが、同じやうな話を今一つ持ち出して見やう。西郷従道侯が臺灣に出征した時の話である。長崎に兵を集めた従道侯はある日全軍を白を集めると命令した。一個中隊でいくつゝの白は、必ず集めねばならぬといふ命令である。民家から借りてそれで足らせば木を截り倒して作れといふのである。各中隊では何事か譯はわからぬが、とに角命令であるからといふので、いはるゝ儘に白を集めた。やがて餅米が分配されて、各中隊では勇ましく餅を呑き初めた。

西郷従道侯の話

政府の方では時機尙早といふやうな考へで廟議一變臺灣へ兵を送る事は止める事と爲り、従道侯に中止を命すべく、大久保公を出發させた。大久保公が命を奉じて長崎に来て見れば軍艦は黒烟を吐いて出發しかけて居り、従道侯の陣屋では各兵皆後ろ鉢巻で元氣よく餅つきをやつて居るのだ。不審に思ひながら命のまゝを従道侯に告げようとした時、従道侯は「利通どん、おいらの兵隊は、臺灣行を喜んで、餅ついでる。軍艦を見なはれ、うれしさうに黒烟をはいちよるぞ」大久保公は遂に辭なくして去つたといふ事である。斷行を圓滑ならしめるためには、是非機先を制する必要があるのだ。この呼吸を知らぬものは世に所謂猪武者となり終るであらう。進むもの必ずしも賞むべきでない。要は熱慮斷行の四字にある。

輪廻に就て

人生の輪廻

輪廻とは、各方面より思考することを得る事項であつて、此を理學的方面より説明し、又佛教の見地よりするも最も重要にして、最も面白く攻究せらるゝ問題である。先づ卑近に云へば、吾人人類の生活は則ち輪廻である、生れて成長し、壯年となり、老年となり、終に死滅する。此個人の輪廻にして又之を人生の上より觀察すれば、親は子を産み子は孫を産み、斯して子々孫々に至る之れ人生の輪廻である。更に又吾人の生存する社會を見るに、富貴なるもの永久富貴を繼續するものでなく、貧賤者が永く貧賤者たるものでない。富者衰へて貧者となり、貧者榮えて富者となり、貴者も亦賤者となり賤

輪廻に就て

八七

植物動物の輪廻

者も貴者となることがあるもので、人世の榮枯盛衰は循環して止む時のないものである。彼の秦の始皇が、二世三世より千萬世に傳へんとの雄圖も、纒に二世にして亡びたるが如き、貧富貴賤の循環の止むなきは最も味ふべき事柄である。故に富貴なるもの、苟も飽食暖衣驕奢ならんには、忽ちにして財産を蕩盡し其位置を失墜すべく、貧賤なるものも、刻苦勵精身を修め徳を研かば、富貴に上るの期あるべく、斯かる輪廻あればこそ世の中は面白く、人生問題も亦研究の價値があるではないか。

次に植物の上に於ける、輪廻の有様如何を見るに、彼の落葉樹の春の緑の色變じて秋の紅葉となり、終に落葉し更に亦緑葉を見るに至るが如き、四時遷轉し、常緑樹之雖も、新陳代謝古葉去りて新葉發するが如く、落葉樹常緑樹に關せず、新陳代謝するは一年間の葉に於ける輪廻であつて、花に於ても

有生物界及無生物界の輪廻

亦花落ち實を生じ實は地に墜ちて翌春新芽を發し、新植物を形成する、一年生植物にありては、一年間は莖葉發育して黃熟枯死するに至るも、其種實のみは健全に發育し其翌春其種實によりて發芽して成育し、一年生のものは一年を周期とし、二年生のものは二ケ年を周期とし、多年生のものは多年間を周期として、循環輪廻をなすもので、松杉の如きは三四年を一周期とするものである。是れによりて觀れば、植物は其一植物體の一部分に於て輪廻し又全體に於ても輪廻することが知らるゝのである。次に高等なる動物、則ち人類は勿論最下等動物なるアミバの如きに至るまで、其生活作用は皆植物の生存作用の如く輪廻であつて有生物は何れも此理法を脱すること能はざるものである。

更に歩を進めて無生物に就きて述ぶるに先だち、有生物無生物間相互に輪

廻の原則に従へることを説いて見よう、今假りに動植物の呼吸作用を見るに動物は酸素を吸うて炭酸瓦斯を吐出し、植物は其の炭酸瓦斯を吸入して更に酸素を吐きて之を動物に供給するが如き、更に吾人は植物を食物として生存し、其身體の破壊分解せらるれば、其の身體は再び種々の無生物たる炭酸瓦斯アンモニヤ等の如きものと爲り、植物の肥料となりて吸収せらるゝものである。則ち動物體は分解して無生物となり、植物體の營養となる、則ち動物體植物體に得たる營養を再び植物體に返すものである。有生物無生物間に於て吾人有生物は、無生物たる酸素を呼吸して身體を保ち、再び分解して無生物に歸る、是所謂相互間の輪廻である。

更に進みて無生物の上のみに就いての輪廻を述べんに、大體世界を構成する岩石を大別すれば、一火成岩、二水成岩、三變質岩、の三つになる、火成

無生物界の輪廻

岩は高熱の爲め溶解せられ、流動状態たりし物質が冷却して固體となつたもので花崗石の如きものである、水成岩は水中に溶解し、又は混在したる砂土岩屑が、水底に沈積して岩石となりたるもので、石灰岩の如き又は粘土の固まりて出來たる粘板岩の如きものである。變質岩は水成岩又は火成岩の著しく變化したるもので、武州秩父附近に存在せる青色の岩石の如きものである。而して此等岩石間にも亦互に輪廻の理法行はれつゝあるは、頗る趣味あることで、例へば花崗岩の雨露等の爲め分解せられ、水に流され水底に沈積せられて水成岩となり、此の水成岩は岩石の下層に敷かれて、強壓と高熱との作用によりて變質岩となるが如き、又一種の水成岩崩壊して更に水成岩を形成し、花崗岩の如きも變化して片麻岩となるが如きは、火成岩より變質岩となるもので、此の如く岩石間則ち無生物間にも輪廻の理法が行はるゝもの

山岳の輪廻

である。
地表の變動によりて、或は山を作り或は谷を作るなども、亦地形の輪廻に外ならぬ、地形の重なる要素は何であるかといへば、山と川である。此の山と川とに就きて觀察するに、富士山の如きは幼時期に屬するのであつて、地質學上より論ずるも何れも尙幼少である。

お富士さん霞の衣脱がしやんせ

雪の肌が見とござる。

とは、如何にも其幼年期を言ひ表はしたものである。箱根山の如きは、箱根の嶮と稱へ其勇壯なる富士の圓錐形なるに比して數多の輻谷を有し、頂上に硫素の噴出を見るも噴出せし傳説をさへ聞かす是山の壯年時代にして、富士山よりも年長けたり、富士山の如きも後年に至りては箱根山の現今の如き狀

河川の輪廻

態に立至るであらう。中國地方に於ける如き山岳は花崗岩を以て組成せられノツペリとしたる形態にして、急峻なる溪谷も甚だ少くして山容何となく奇抜活動的ならざるは、其老年期なることが知れる。

川にも亦幼壯老の三期に區別することが出来る、又同一の川にても上流中流下流ありて、上流は幼年期中流は壯年下流は老年期と考へることが出来る上流にありては、地面の傾斜甚だしく水量少く急激にして、白沫紛飛する活潑な有様、恰も幼年期の如き心地がせらるゝ。中流に至れば、水の分量次第に増加し、勢力加はり堅い岩石をも浸蝕し、破壊力増大となると同時に新地を作る等の建設作用も亦増大するものであつて、恰も壯年の活氣満々たるが如きものである。下流に至りては水流緩漫にして白帆上下し兩岸廣濶にして其悠々たる恰も老後を樂み餘生を送る様が現はれて居る、是れ老年期に比

平原の輪廻

すべきであらう。而して此の水一度海に注ぐや、蒸發して雨となりて、降りて溪流を涵養し再び川の幼年期を再現する。

地形に於ても亦然り、關八州平野坦々一望限りなきが如きは、是れ利根川等により形成せられたる沖積層大部を占め、其形成の有様を見るに、無論幼年期であつて、一度足甲信の山地に入らむ地形彼處に瀑布あり、此處に深谷あり、奔流あり、巨岩ありて、全く關東平野の地形と其趣を異にしてゐる。此れ壯年時代といつてよい。而して遠く中國地方及び北日本阿武隈山系に見んか、傾斜寬にして溪谷亦廣く其流れ穩かにして、老年の相を呈して居るのである。偕て此地形に於ける循環は如何、幼年時代たる平原は次第に隆起して、地層の收縮によりて次第に海面より高くなり、山岳を崛起し壯年の地形となり、壯年の地形は浸蝕摩滅せられて、老年の地形となり、更に老年

エネルギーの輪廻

の地形は削られて河側又は海岸に沈積し沖積土となり、又再び幼年時代の地形を形成するもので、斯く天地間の森羅萬象常に循環又循環して止むなきは、此の天然自然の輪廻である。

古昔水火を以て萬有の根本とせるは大に面白いことで、水を物質の代表者とし火を以てエネルギーの代表と見たのである。今エネルギーの輪廻を説明する爲め例を熱の輪廻に取りて曰へば、熱のエネルギーは運動變化し、運動のエネルギーは再び熱に復するが如き、吾人の日常實驗する所であつて、人の運動は體温を亢進せしめ、體温は又人體の活動を促すが如き皆然り。軌道に用ひたる石油發動機の如き、又電燈に就きても電流は變じて熱となり、熱は光に變じ、又更に光は熱に變じ、熱を電流とするが如き、又ソレノイドに電流を通じ置いて軟鐵を挿入すれば、軟鐵を磁石となすべく、又ソレノイド

輪廻に就て

の中に磁鐵棒を急に入るときは、ソレノイドに電流が起るが如き、是れ電氣と磁氣との輪廻である。物質の根本は、從來七十八元素と稱へ、此の元素の化合状態に依り諸物質生じ、諸物質は元素に分解するを得るも、此の元素なるものは、更に分解すること能はざるものなりとして論定せられたりしが十數年前佛國のキュリー夫婦によりて發見せられたるラヂウムは、元素なるにも拘はらず、尙ほ之れよりヘリウムを出す故に從來の定説たりし元素は元素を出すことを得ずとの假定は破られたのである。現今にては帶電子とて、物質か電氣か不明なる程微妙なるもの、集合の如何によりて、各物質を作り得ると云ふ説あるに至つた。これに因て考ふるに、萬有は終に一に歸するに至るべしと思はる。古來希臘にては地水火風を萬物の基礎なりと稱へ、支那にては天地萬物大極(陰陽の元)に歸すといひ、佛教にて 心(眞如門生滅門の

輪廻の解釋

根本) 大乘起信論に稱へたる、唯心論靈妙なる萬有の本體を唯識と説ける唯識等にして、則ち唯心論なる一元論を稱へ、物理學者は唯物一元論を稱へ彼のエレクトロンに歸するを見れば、佛教の色心不二の説愈味ふべく、斯く漢土泰西印度等古今學者の議論偶然相一致するも亦妙である。斯く論じ來れば人生は輪廻しつゝ一定の徑路を辿るものであつて、輪廻は或方面に進む道程であることは、丁度水の波動が水分子の一高一低の波を生じ、更に其波動の進行の波動の高低と直角の方向を取り進行するやうなものであつて、人生の輪廻も進化退化の高低の波を生ぜしめながら、絶對的向上の道を進みつゝあるのである。即ち此向上の道に従ふものは善の道に就くもので、之に反したものは即ち惡である。而して吾人は如何にしても此の輪廻なるものを脱却する事は出來ぬものであるから、其輪廻の法則を知らずして

逆境に悲観するが如きは種々の損害を來すに至る。此れは則ち向上の道に着せざる病弊である、人苟くも此の天地向上の大道に氣を付けなば、自己一人此の大活動の一部分なることを知ることを得べく、且つ順逆兩境共皆向上の大道の徑路なるを知らば、人生の盤根錯節に處し常に愉快と感謝とを以て、悠悠々として天を恨みず人を咎めず道に進むことを得るのである。されば之を曲解する時は大なる誤謬に陥ることがある。佛教なるものは一に此理を説けるものであつて、釋尊をして今日あらしめば、或は今日の學理を引用して説明せられたのであらうと思はるゝ。

輪廻の妙旨

此の天然自然の大道輪廻の妙理を解釋玩味したならば、自己の執れる職業の如何に關はらず、事々物々皆大なる樂みとして努力することが出来るのであらうと思ふ。殊に教育者の如き神聖の職を奉せらるゝ人々は、此の道理を考へ短き一生を悲観せんよりも、人生樂觀し、自己は偶然に生れ出でたるにあらずして、天地自然の輪廻の理法により生き老い死ぬるものであつて、其の間に向上の道を踏み天地の化育を翼賛するものなることを考へなば誠に意義ある生涯となり、醉生夢死するの愚者なきに至るべしと思考せらるゝされば、吾人は人生に對し活眼を開き輪廻の妙旨を達觀し、天地間の公道を履行し、向上の道程を満足に經過したきものである。

修養と研究

先づ本論に入るに先ちて緒論として修養と信仰とはどうして兩立し得るかといふ事を述べよう。抑も今日の理科學の發達はどうして出來たかといふと

假説の上に立つ理科學

是は申す迄もなく不明（イグノランス）なる事を分りたい、明かになりたいとの要求より生じたるもので、今日と雖も野蠻人等は猶ほ分らずに居る。之が分りたいたいふので奮勵努力研究した結果が理科學となり、哲學となつたのである。故に不明といふ事が研究の根本である。之に因つて疑を生じ、如何なれば冬が寒く夏が熱いであらうかと疑ひ、研究の爲に事實を調べ、錯誤を正し、比較推究して原理を發見した。之が發達の道行である。夫れで理科學哲學は非常に明確であるは勿論なれど、猶ほよく調べて見ると絶対に明確ではなく、従つて常に變遷するものである。そこに進歩があり發達がある。今日と明日とは同じものでなく、今日の眞理は明日の眞理ではない。又斯く變るのがよい事で、何れも常に變つて居る。要するに理科學や哲學は「おとぎ噺」に過ぎぬ一時的のもので、先きに行けば行くに随つて變化し、唯一時

的に假定せられて居るもので、常にそれからそれと假定の下に進歩する。此假定假説が進んで定理となり眞理となる。眞理となるには確實に證明せらるゝ事が必要である。學者は宇宙根原を説明するに星雲説を以てし、地球其他土星木星天王星海王星等は之に依つて説明せられて居るが、之も必ずしも完全無缺ではない。此以外のものもある。又定理の如きも實は假説であつて、定理も又變化する。それ故一時的の假定にすぎぬ。

以上は唯抽象的に云つて見たのであるが實例を擧げて言へば第一に物質の根原である。希臘にては地水火風を物質の根原とし、萬物の本とし、原素として居つた。之は茫漠たる話であるが、地は固體、水は液體、火は力（エネルギー）風は瓦斯を象ると考へて居たが、印度にても同じ地水火風を根原と考へ、尙此外に空識の二原素があつて、空は（スペース）納れるもの識は精神

鉛を黄金に變化さす試み

作用をいふ此六を根源とした。之が最も古い根源説で時代が進み、更に鍊金學(アルケミー)が起り、其起源は鉛を黄金にすることは出来まいかと言ふ慾張つた考に始まり、疑が起つて遂には國家的利益の考より、國家迄が補助をして其研究をさした。之は若し地水火風が根源であるとすれば、同じ固體に屬するものであれば、必ず鉛を黄金に變化し得べしと考へ、不明が疑を生じて随分骨折つて研究した。けれども遂に成功せず、其結果鉛もこの根本的の物體で、黄金も同様根本的物體であつて原素であると分つた。故に如何に研究して見ても他の物は作る事は出来ても到底原素を更に分つ事は出来ぬと知れた。以後の學問もこんな具合にして起つて來た。夫れで最初鉛を金にする事は出来なかつたが、其副産物としては鉛は一つの原素であるといふ事が分り、種々研究の結果酸素水素も根本的物質で原素であるといふ事が分つ

た。同時に天地間に六十四原素があり、互に化合混和して萬物が出來上ると知れた。

原素が原素を生む

斯の如く地水火風説が進んで六十四原素となり、六十四原素説が出て地水火風説は昔の一場のお伽噺となつて仕舞つた。然るに又此六十四原素説も更に進んで七十八となり、今日にては既に八十二原素となつた。私共の子供時代には七十二といつて居たが、現今は實に八十二原素である。斯の如く六十四原素と教へられた時代が進んで八十二原素の時代になつて來たが、又更に今後進んで九十二とか百とかに増加して行くのは明かである。今日は八十二原素となつて居るが、進んで研究をして見ると、尙原素は絶對的に分つ事の出來ないものではない事が分つた。西曆千八百九十八年キュリー夫妻がラヂウムを發見したが、之は最初夫人が先に研究して夫も加勢して研究した

のである。ラヂウムは特殊の光線を放射する頗る貴重のものであるが、夫れはさうして分つたか、最初レンツエンがエツキス光線について研究して居たが、其研究が更に進んで、エツキス光線と類似の光線を發するものがあること分つた。其れはウラニウムである。併し其研究が愈進んでウラニウムのみでなく、他にもあるといふ事が分つた。そしてピツチブレンデ（黒色物體）の中にウラニウム以外の或別物が少しある事もわかり、其れに關する研究は愈進んで、ラヂウムなるものが其中にあることが發見せられ、其結果ラヂウムはウラニウムと共にピツチブレンドの中にある事が分つた。併しラヂウムは極めて少く頗る貴重なもので、一グラムもあれば價實に數萬圓である。然るに又空氣中にヘリウムの瓦斯體（原子量六といふ極めて軽いもの）がある事が分り、ヘリウムは始め太陽の中にある事は分つて

學術上の大變動

居たが、又地球上空氣中に僅にあると知られた。キュリー氏の發見によればラヂウムを放置すれば漸次このヘリウムが出る事が知れた。此ヘリウムもラヂウムも明かに原素であつて、以前は原素中より原素が出来る事は絶対に不可能なものと思はれて居たが、併し事實は致し方はない。茲に至つて原素の不可分説は成立しなくなり學説を根柢より破壊し、從來の學説にては説明が出来なくなつて學者は大に苦んだ。此に於て一説を案出し原素、分子、原子、電子、（エレクトロン）といふ風に説き出し、原素を別てば分子となり、分子は原子となり、原子を分てば遂に電子となり、最後は總て電子であるといふ事になつた。そして其電子の集り方成は數によつて物體は各變つて來るのであると説明した。昔は原子に共通點はないものとして居たが茲に於て物質は總て電子に歸するものとなつた。然し原素製造は實

際には出来ないが、研究は進んで居る。之によれば電子の集り方に因つてラヂウム、ヘリウム、酸素、水素等の元素が出来事となり、ラヂウムよりヘリウムの出来るのは電子の集り方の變化によつて出来るものと説明した。茲に至つて元素より元素を作る事が出来る筈になつたので、之は學術上の大動搖大變化である。それで昔アルケミストが鉛を金に變せんとした研究も、當時失敗して不可能と定められたが、今日の研究よりせば絶対に不可能なものではないといふ事となつた。併し之は理論上の説明で、唯人工ではまだ作り出す事は出来ないで、天然の力を待たねばならぬのである。

併し又一方より言へば必ずしも人工で作出す事が出来ないでなく、以前天然力に非ざれば出来ないとして居た尿素が、百四十年前人工を以て化學的に作る事に成功した。又砂糖も前には植物より取らねばならぬものと思つ

ラヂウムの
発見と電子
説

て居たが、今日學者は元素より砂糖を作り得るのである。こんな實際があるから、理論上出来るものであれば、或は百年二百年の後には實際出来るかもしれないぬ。さうなれば黄金製造株式會社などが盛に出来るだらう。其れで科學の進歩により、研究は更に進んで、萬有は遂に一元に歸するに至つたのである。又物理學者は萬有の根原を物質とエネルギーであると説明するが、物質はエネルギーであり、エネルギーは物質であり、そしてエレクトロンも物質でありエネルギーであるから、結局は一元である。茲に於て我等は明かに古今を通じて一貫せる二の事柄を知る事を得た。第一に學説は循環して元に戻り、第二に學説は時々刻々進んで變化する事である。即ち彼の鉛不可變説は茲に否決せられて可變となり、萬有一元論も昔に立返つたのである。又支那の大極論も、ギリシヤの地水火風説も、又物質精神の二元論も、唯物唯神

の一元論となりて、斯の如く反覆して居るので、常に學説は變化して昨是今非の姿である。物質上については上述の如くであるが、エチルギーに就ても學説は常に變化して居る。一例を挙げれば昔は光線は微分子が飛んで行くと思はれて居たが、千七百年代フイゲンヌ出で、波動説を唱へ、エーテルの波動によりて傳播するものと説き、エチルギーは總てエーテルの波動に依ると説明した。併し又最近ラヂウムの発見により電磁説起り、光熱磁力の傳はるは極微分子ありて飛び行くものとした。其内容は變るが微分子が飛ぶといふ點に於ては幾分相似たところがあり、元に戻つた形である。斯の如く物質上の説明もエチルギーの説明も循環するものである。

佛は直覺で
論えよ

佛敎の通則とも言ふべきは諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法印であるが、又物理化學にも原理がある。物質不滅、勢力保存、萬有引力の三法則で

之は總ての研究の基礎である。之を信せねば理化學は進む事は出来ぬ。此三法則が如何程事實に適合し如何程迄事實によつて證明せられて居るかといふに、之に但書がある、おまげがある。實驗にあらずんば認容せずとなつて居るが、猶物質不滅の法則は實驗によればどうしても總量は不足する。例へば蠟燭を燃して見てもわかる。言はゞ勘定合つて錢足らずである。一度分解分析したものを、再び完全に集め得るものは到底ない。獨逸學者の著書「ブデイズム、エンド、サイエンス」に書いてある中に「眞理と實驗の間には人力で踰え難い溝渠がある。この溝渠は直覺で踰ゆる外はない」と言つて居る。又勢力保存の説に於ても熱や電氣に至つては更に多くの不足量がある。之に對して學者は熱や電氣が空中に逃げるからだと言つて居る。又逃げずには居らぬ。之がおまげである。即ち例へば月給は毎月其百分の一を引かれて

居るのに、所得税は引かぬもので取られるから正直者は直ぐ不足をいふのである。則ち勢力保存や物質不滅は実験では説明せられて居らぬ。実験は常に足らぬ事を証明して居る。故に不足をいふものは馬鹿でなく正直である。去れば専門的學識のものより見れば今日肯定せられて居るところの法則は實に怪しいもので、電磁やエレクトロン説など共に不確實である。併し不確實の儘信じて進まねば進んで行けぬものである。故に批評家等は之をお伽噺と言つて居る。

實際と眞理

以上の關係は拋物線と漸近線との關係に等しく、一の拋物線に對して引かれた漸近線は、進むに従つて次第に接近するが、其一致は無極大の距離にして初めて相會するが有限の距離にては常に双方の間に若干の距離があり、眞理と實際とは必ず其間に溝があるが、兩者は一致するものとして信じて居る。

故に眞理は只吾人の頭腦中に信する事によつて完全に證せられて居るので、實際實驗の上には儘に差がある。故に推理主義も常に實驗によつて説明せらるゝに非ずして其中には必ず四捨五入されて居るのである。尙一つ残るところのものは引力説であるが之にもおまけがある。二つの物體の引力は質量に正比例し、距離の自乗に反比例するとしてあるが、之はニュートンの説であつて矢張おまけがある。其以下に第二項第三項がある。其れが第一項に比して非常に小さい爲に切り捨てられて居るが、天體の如き大きなものを計算するには、第二項以下の面倒なるものを用ひねばならぬ事がある。又例へば圓周率もおまけがある、普通は三一四であるが、其以下に尙一五九六七………と言ふ數があつて、之でも猶ほ實際とは合つて居ない。又地球の形狀も昔は平たいと言ひ、圓といひ、橢圓といひ、扁平だといひ、或は南北に扁平東西

に扁平と言ひ、赤道に並行して扁平であると極つて、其切口が矢張り理論通りに合はないので、其後扁平楕圓だとか六ヶ敷言ひ出した、そして最近地球の形は『ゼオイド』であるとなつた。併し之も亦學説と事實と合はなくなつたが斯くなれば實驗上の學問も信するより外はない。起りは不明であるが、研究して出來た或る部分の外は、全く信するより外に途なく、結局人間の直覺（インクイション）に於て外はない。

修養は直覺の領分

處で修養上宗教を信するは、同じく出發點は不明不安闇黒面にあるが、之を充さんとする慾望より起り、此要求に應ずるものは直覺である。禪宗でも坐禪觀念で考案し、本來の面目を直覺し、真宗でも直覺であり、結局は信仰に入らより外はないが、又推理と直覺とは全然相反するものでなく、直覺し得る事が推理の根本となる故に、信仰を本とする宗教等にして推理は全く許

さないのではない。故に満足する迄は人々の推理を許すのであるが、唯人々の智識の程度に従つて、人々の推理の程度が又異なるが故に智識以上に於ては直覺する外はない。是に於て理學と宗教とは又互に調和し統一するものであるが、然し智識以上に至れば直覺がなくてはならぬ。即ち宗教と理化學とは衝突しないが實際である。而して修養とは意思の領分に屬し、意思の強さを要求する。又研究は智識の領分で、信仰は一面智識であるが大部分は情に屬し、結局智識、意思、感情を満足さすればよい。そして人間に感あり感はずらんと努めるが修養である。惑は動にして修養して惑はざるは不動である。孔子は吾三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順す、七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えずと言つたのは、孔子實際の經驗で修養の賜であらう。

一 智情意の統

宗教で言へば惑は動で、大乘起信論に惑(動)生滅門、不惑(静)真如門一心
 二門(生滅門、真如門)と説いて、生滅は動にして真如は不動である。此
 二者が相應し相融合すれば必ず相一致し、生滅と真如とは如何なる場合に於
 ても背離せぬといふのが大乘起信論である。修養法は之に外ならぬ。修養は
 惑より不惑に進むもので、研究は不明より明に進み、信仰は不安より起り次
 第に安に移つて行く。安と明とは相関連して、不明則ち闇のところに不安が
 同居して居る。故に闇であれば不安がある。禪宗などには明鏡と言つて、
 心を磨き上げた様にならねばならぬ。埃も曇もない有様である。斯の如くな
 るのが悟道である。信仰である。又淨土真宗に於ても不安は不明より來り明
 佛智と信すれば自然的に佛の智識によつて明になり安になる。故に愚夫愚
 婦が明になるは信仰の徳であつて、従つて生死の境にあつても大安である

安なるは明なるが爲なるが、一方智者學者であつて餘程修養が出来て居る
 人でも、一旦病氣となり生死の問題に逢着した時に不安を生ずるは、猶ほま
 だ明が確でないからの事である。愚夫愚婦が智なきに拘らず生死の境に猶
 安なるに比すれば、猶ほ不徹底の傾きを免れぬ。愚夫愚婦は信仰によつて徹
 底的に明であるけれども、智者學者は研究によつて明なりと信せるが爲
 生死の問題に迫られては不安ならざるを得ないのである。故に人が生死の問
 題を突き付けられて尙安なるものは已に迷惑も不明もなく大悟徹底せるもの
 である。之に反し心の奥底に尙潜在せる不安があるのは精神の或る部分にま
 だ不明を残して居るもので、此れはまだ完全なる人格と言ふ事は出来ない。
 又智情意の三方面から言つても其れが統一されて居なければ完全な人格でな
 い智情意の問題に於いて全然と安と明とを兼ねる所あれば最早修養はそれで

悲愴第一

澤山である。

安心がなければ人に聞くなり修めるなりして不安の所を拭ひ去らねばならぬ。然るに近來佛教等を聞く人の態度に、佛教を以て修養の材料にせんとする人、又は信念の根柢たらしめんとする人等がある。信念の根柢たらしめんとするものは信仰本位で、材料たらしめんとするものは修養本位である。今其の利害得失を研究して見るに、信仰なき修養は人事を盡して天命を待つと云ふ所に落ち行くに極つて居る。信仰なき修養に依つても修養は出来るが、人事の複雑なる、修養ある人にして往々災厄に逢ふ事がある。孔子や顔回等も其の一人であるが、若し災厄にあつたとして、人道上許し難い人間であるに拘らず、其の有福に暮して居るのを見れば、修養本位の人は是に天道是非かと言ひ度くなる。此れが現在に現はれて居るので、どうしても信仰なき

佛光禪師の話

修養は此處に落ちて來ねばならぬ。孔子の如き聖人にして人事を盡して天命を待つと言ひ、災厄に逢つて是か非かの嘆を發する。一面此れは悲愴な事であつて、此れを以て修養は満足する事は出来ない。此んなものは更に一步進んで安心立命の地を求めねばならぬ。實に人事を盡して天命を待ち、天命一度降る時に於て是か非でもやらねばならぬのは悲愴の第一である。斯の如き不徹底の信念より出づる修養は、最後に至るまで不安を伴ふもので、如何に研究し考へても善いか悪いか分らず、孜孜として努力してもどうしても明且安になる事は出来ぬ。それで佛語にては臨終正念と言ひ、死ぬ時に正念でなければ安心は出来ぬ。多くの人は死に當りて遽に叫び苦しむで神に救ひを求むる。基督の如きも正に死せんとする時神や吾れを見捨て給ふかと叫んだといふ事であるが此等はまた不安が残つて居たのであらう。故に

徹底せざる信仰は何處かにまだ不安が残つて居て、平常は明で安心して居ても、死の間際に其れが頭を擡げて來るのである。此點より言へば全く信念なき者と相似て居る。徹底せる信念より出る修養は一點の不安なく不明なく、禪にて申せば例へば犬が一匹殺されんとして居る時、なほ自分が死んで犬を助けてやらうといふ事が平然として出来るさうだ。彼北條時宗をして三十餘歳にして平然元使を斥けたあの度量と決心とを修得し得させたる佛光禪師(祖元)は入道の初に當りて「竹影掃階塵不動月穿潭底水無痕」と喝破し、又元兵の爲に白刃を以て通られた時平然「乾坤無地托孤筇、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斫春風」と言つて居る。佛光禪師は元宋の遺臣で本朝渡來後圓覺寺に住んだが宋の元に亡ぼされたる時、元の兵禪師の室に侵入して將に殺さんとした時、斯く喝破したのである。時宗は禪師に就て修養

天命を樂んで人事を盡す

したが、其師の祖元が信仰に入るの始めは實に最の二句である。竹掃であれば塵が立つが、竹影は少しも塵を立てぬ。月は幾尺の深さを通じて水に映つて居るが、更に水は亂るゝ跡がない。之が眞の悟りである信念である。此入道の信念を持つて居た師が時宗を徹底に導き、彼の大事件をして快刀亂麻を斷つが如きの概あらしめたのである。そして祖元は多くの元兵が室に來りて殺さんとする時、大元の劔下に我身體を置くも、殆ど電光影裏斫春風のやうに何の加ふる所ないと言つたので、元兵遂に退き去つたと言ふ。逃げ隠れたならば或は切られたかもしれぬが、泰然として居たならばさう斫られるものではない。徹底せる信念は茲に至らねばならぬ。此状態は聊かの不明なく不安なく實に泰然自若たるもので、斯の如く極致に到達するには一に信仰に依るの外はない。徹底は全く修養の至れるもの、

誠に天命を樂むで人事を盡すものである。人事を盡して天命を待つに比すれば誠に安で一步上である。之を知るものは之を好むものに若かず、之を好むものは之を樂むものに若かずである。茲に至つて即ち切らるゝも可、切られざるも亦可である。其れで煩悶なく惑なきの境に入る事が出来る。吾人の修養は先づ茲に立脚點がなければならぬ。涅槃經にも斯の如く説いて居る、「有信無解、増長無明、有解無信、増長邪見、圖通信解、方為行本、」斯くあれば頗る適切である。有信無解は迷信盲信にして無明を増長し、汚れたる神水其他のものを飲み、衛生を害し安寧秩序に害ある事をも平然としてやるは之が爲である。有解無信は頑冥となり邪見を増長するのであるが、若し片端より理化學の定理等の如きものを信せぬ時は常に誤解問題に陥る。又全然信念直覺をも否定する時は邪見となるが故に、或程度に達すれば之を信

せねばならぬ。そして信と解とが相調和すれば是正に行の本となり、人間活動の基となる説いてある。天命を樂で人事を盡し推理し研究し修養してゆけば茲に信と解とが圓通するもので、完全なる人格は此處に自ら現出するのである。

中 編

一 次 目 一

| | |
|------------|-----|
| 人生の涼味…………… | 一二五 |
| 明と暗…………… | 一四一 |
| 塵埃の恩恵…………… | 一五一 |
| 科學と宗教…………… | 一六四 |
| 自然觀…………… | 一七八 |
| 相應…………… | 一九〇 |
| 平凡…………… | 二〇八 |
| 犧牲…………… | 二二四 |
| 選擇…………… | 二三七 |
| 水と自然美…………… | 二六一 |
| 自然法爾…………… | 二七五 |

自然科学と宗教 中編

人生の涼味

物心二界の
真理は一致
す

涼味は炎熱
の真ん中に
あり

本日は土用に入つてから大分日も立つて居りまして暑さも絶頂に達して居るのであります。従つて誠に堪へ難い程の暑熱でありますから、話しだけなりとも涼しいがよからうと思つて、取り敢ず人生の涼味と題して置きました。私は常にかう信じて居る即ち物質界に於ける道理と精神界に於ける真理とは必ず符節を合するが如く一致するものであると云ふ信念を有して居るから先づ物質界に於ける真理からお話を初めます。

試みに今日此頃の暑さを如何して避けたらよからうかと云ふに、或は山に

登るも一方法であらう。又温泉に浴するとか、海水浴に出かけるのも確かに一方法でせう。例へば比叡山に登つて暑さを避ける、もとより平地よりは餘程涼しい。然しそれで果して非常なる涼味愉快を覚えるかと云ふに、決して完全なる避暑法ではない。たゞ比較上平地の京都より涼しいと云ふ丈で、慣て來ると矢張り非常な暑さを感じるのである。これは敢て暑さばかりの事ではなくて、交通機關の様なものでもさうである。昔は旅をするに就いても皆草鞋をつけて歩んだのである。足弱な女子供が精々で籠や馬の力を借りたに過ぎない。然るに幕末明治の初めに至つて人力車と云ふものが出來て、當時の人はその便利に驚いた様なわけであつたが、その中に馬車が出來、汽車が出來、特別最大急行でも未だまだないなど云ふ様になつた。相對世界の中に於ては何時迄も満足が出來ないのである。暑いと云ふことも同じであつて

暑さを避る逃げ廻ると云ふことは如何なる方法でも完全なものではない。避暑の最も完全な方法は、暑い真中に於てすることであつて、元來涼しいと云ふ言葉は暑いと云ふことに依つてあるのであるから、熱をすつかり去つて仕舞つて涼しいと云ふことは有り得ない、涼味を感じると云ふことは炎熱界裡の眞つた中に於てあることでもあります。精神界に於ても亦然りであると思ふ。

洞山と快川

洞山和尚と云へば支那に於ける曹洞禪の祖師の一人で實に修養のつんだ立派な禪僧である。或人一日師に謁して問うて云く「寒暑如何が回避せん」と師答へて曰く「何ぞ無寒暑の處に向ひて去らざる。誠に明白な答へである、寒暑をどうして避たらよいかと問ふたから、それは譯もない、暑いも寒いも無い處に行けど、これ程明瞭な答へはない。然るに問ふ者も仲々のくせ者、

「云何ぞ是れ無寒暑の處ぞ」と一本鋭く突つ込んだ處、師泰然として曰く「寒には闇梨を寒殺し暑には闇梨を熱殺す」と。實に名言だと思ひます。暑いも寒いも比較上の事、その對比を撤し寒暑に没頭して仕舞へば寒暑のある筈はないのであります。又甲州惠林寺の快川和尚の如きはこの言葉を正しく躬行實驗した程の傑い和尚である。武田家も武運拙く遂に滅亡の悲運に際會した場合、快川和尚は一山の大衆を集めて懇なる讀經をしてゐた。其處へ勝ち誇つた織田勢破竹の勢ひを以て惠林寺に殺到したのである。信長、和尚に問うて曰く、師何の爲めに讀經するやと、和尚即ち武田家の武運長久を祈る旨を答ふ。信長忽ち冷笑して曰く、武田勝頼既に天目山に死し一門皆滅びたるに際し、その長久を祈るが如きは愚の至り、須らく織田家の武運長久を祈れど。和尚は答ふるに、織田家は彼の大檀越たる武田家の仇敵であるから、そ

涼味を感ずる理由

が長久を祈るを好まざる旨を以てした。爲に信長非常に怒り、直に火を放つて寺を焼いた。その時和尚煙烟の裡に静坐し泰然として曰く「心頭を滅却すれば火も亦涼し」と、猛火に焼かれて自盡したと傳へて居ります。此等は一場の昔話に過ぎないけれども、然しその言葉は永久に生きて居る今日のこの暑さに於て、たい聞いてさへもひんやりする如く感ずるのであります。暑さを逃げては何處にも涼味はない。暑熱に没頭してこそ浸々たる涼味が感ぜられるのであります。先づ物質上から涼しみを感ずるお話しをしますれば、一番手近な話が湯あみをするに涼しい。或は水をかける、電氣團扇を使ふと涼しい。なせ涼しいのか、空氣が身體の熱を取るから涼しいのです。又こちらに餘計に熱があればある程涼しい。それで身體に餘計熱がある時に、急速に而も餘計に熱を取

つて呉れる時は非常に涼しいのです。澤山熱がある時とは盛に運動し活動した場合であつて、さう云ふ時に多量に熱を取るには水がよい。多くの物質の中で水が一番熱を取つて呉れる。なせなれば水が一番熱を吸収するからである。水は比熱の一番大なるものである。比熱と云ふのは其物の温度一度を高めるに入る熱の分量の割合であるが、水が蒸氣になるには、他の液體に比べて一番澤山熱が無ければならぬ。従つて氷が水になる場合も非常に澤山の熱を要する。吾々が氷を噛むと一時涼味を感じるのは、氷が口の中で溶けて水になる迄に、身體から多量の熱を吸収するからである。

涼味を感じるに就いては非常に澤山の熱が入ることであるが、而もその熱を急速に取るのでなければ大なる涼味がないのです。金屬や硝子などに手を觸れると、木や着物などに觸れた時と違つてひんやりと感ずるのは、これは熱を奪ひ取る量には大した差異はないけれども、熱を取り去る度合は金や硝子が急速だからであります。

其故に涼味を感じるには、第一に熱が多量なること、第二に熱を奪ふことの多量なること、第三には熱を奪ふことの速かなること、この三者によつて大なる涼味を感じ得るのであります。

液體空氣

空氣は普通の場合に於ては熱を吸収する力が弱いものである、がこれが運動する場合に於ては熱を奪ふこと頗る大なるものである。故に風が出て空氣の運動の早い時には涼味を感じるのである。空氣からだんく熱を下げて行くこと云ふと随分と冷いものになります。獨逸のリンデと云ふ學者は空氣を液體に化することを工夫發明した。それは即ち空氣から熱を奪ふと云ふ方法です。人間でも温度さへ高くすれば瓦斯體となつて仕舞ふ、骨でも皮でも皆發

散して影形も無くなつて仕舞ふものです。同時に又温度を下げますと血液までも個形體となるものであります。空氣は元來「永久瓦斯」と云ふ名の付いて居た程のものであつて、液體にはならぬものと考へられて居たのであつたが前記のリンデと云ふ人によつて、攝氏零度下百九十四度のあたりに於て酸素窒素も皆液體になると云ふことが發明された。水色の綺麗な液體であつて、亞米利加などでは之を賣つてゐる店があると云ふことです。何しろ氷よりも遙に温度の低い冷さであるから、結構な涼しいものであります。

然らば空氣を液體にするにはどう云ふ手続きをするかと云ふにこれが餘程面白い。先づ空氣を強く壓搾すると所持して居る熱が幾分發して温度が高くなるそれを氷で冷して、外から熱を與へる事なしに擴げると云ふと、一段と又温度が下がる。何故かと云ふに元來空氣が擴がるに就いては熱を要するので

あるが、今は外から熱を吸收することが出来ないから自己の有する熱を費して擴がるのである。それを又すぐ壓迫し氷で冷し擴げる。かう云ふ手続きを何十遍と無く繰り返して、攝氏零度下百九十三四度あたりまで下げれば遂に液體になつて滴るのである。この事は我々人間の精神修養の上にも誠に味ふべき事だと思ふ。

修養の秘訣

我々が一人よがり世間に出て四方八方の周圍からウンと壓迫されると、腹を立て、眞赤な顔をして熱を出す。然し四境聲無き節、端坐默然として考ふれば、成程自分にも短處がある修養が足りないのだと思ふ。これは大分熱の下つた處です。さう云ふ下から壓搾されると亦腹を立てるが、冥想反省して自ら悔い改むるといふ具合に又次第に修練がつむ、こんな事を何遍となく繰り返すと次第に涼しい精神となり、温度攝氏零下百九十何度の綺麗な液體

奇々妙々の
液體空氣

となつた處は、湛然寂靜で、たとひ佛の覺證境とまでは行かなくとも、羅漢位になる處であります。斯く空氣を液化する原理方法が矢張り精神上の修養と一致するのであります。

さて前にお話したような手續きで出来たところのこの液體空氣は實に調法なものでありまして、今日のやうに暑い時分であつたならば、それを客間にふり蒔きでもすると、何よりも一番の御馳走であります。且つこれは非常な清潔法にもなる、なせかならば非常なる寒冷の爲に微菌が死んで仕舞ひ又は一時活力を失ふのである。又この液體空氣に人間の手が觸れてはいけない。これを取扱ふのに始終皮の手袋を用ひなければなりません。これは「ちか」に手を觸れるとやけどをした時と同じやうに爛れるからである。やけどに對してはいえどでも云ふべきでせう。又アルコールをこの液體の中に入れると直に

凝結して固體となる。ゴム鞠に液體空氣をふりかけると忽ちに硝子の球と同じになり、それを石にでもたゞきつけるとチャリンと割れて仕舞ふ。實にこの液化したる空氣は一寸常識では考へられない程色々な面白い事が出来るのであります。

わが精神界に於ても亦これと同じことであつて、修養に修養を重ね、所謂苦修練行の極致、大悟徹底した聖者の境界ともなりますれば、我々凡慮では思考することの出来ない摩訶不思議なる自在の仕事が出来るのである。

面白い暗示

液體空氣には色々なの特長や使用方法があるが、爆發藥としても亦最も能率多く且つ極めて安全なものである。今日世界の鑛山や其他に於て、爆藥の不完全から生命を失ふ者の數は決して尠少でない。然るに若しこれに液體空氣を用ひる事になれば、この憂ひを少くすることが出来るのである。何故なれば

この液體空氣は空氣の何千倍と云ふ程に縮まつて居るから、一度これに急激に熱を加へたならば、その膨脹によつて激烈なる爆發をするのである。又若し熱を加ふる具合が悪くて急に爆發しないにしても、それを放任して置けば時の立つに従つて何時とはなしに次第に外界の熱によつて發散して仕舞ふのであるから、其處に何等の危険も伴はないのであります。それであるから今後に於ては爆發藥としても盛に應用さるゝことゝ思ふのである。要するに今日に於ては、この液體空氣は物質界に於て一番涼しみを與ふるものであります。而もその最初に於ては最も多量に熱を含んで居る空氣であると云ふことが、甚だ面白い暗示を我々に與へるものであると考へるのであります。

ウンと儲けてウンと遣へ

精神的修養に於ても亦然りて、多量の熱のあるによつて大なる涼味即ち徹底に悟入するのである。然らば熱とは何か、腹を立てるとか、欲の皮を厚くするとかと云ふことである。而も今日、文明だ活動だなど、云ふ事が、益

神經をいらだゝせて成功熱に浮れ、此等の熱を高くする許りである。此頃の成金などは單位が一千萬圓だと云ふことです。熱必ずしも悪くはない、熱が無ければ涼し味がないのであるから——。ウンと儲けてウンと遣ふ、其處に涼味がある。

涼味と佛教

小乘佛教は、成るべく熱を起さぬやう起さぬやうと、熱を抑へつけて其處に涼味を感ずると云ふ消極的の教へである。然るに大乘佛教は多量な熱を起して、熱そのものゝ中から大なる涼味を感ずると云ふ積極的の教へであります。

我が淨土他力教に於ても煩惱を斷せずして涅槃を得と云うて居るが、これ即ち熱の多量を有して而も其儘に於て大なる涼味を感ずる、貪欲瞋恚愚痴の

救済の法悦

三毒の上に於て如來大悲の光明を仰ぐと云ふのである。然し眞宗に於て決して罪惡を造れとは教へぬ、もとより罪惡は惡むべきもの除去につとむべきものである。たゞ如來の救済に於ては徹頭徹尾罪惡を障礙としない。寧ろその罪惡の上に佛の光明を仰ぐ、光りを見る否一步を進めてその罪惡觀の熾盛なればなるほど、法悦の深大なるものであつて、これが即ち他力易行道の特長淨土眞宗の有難いところであります。

親鸞聖人が御和讃に「罪障功德の體となる、こほりとみづのごとくにて、こほりおほきにみづおほし、さはりおほきに徳おほし」と云はれて居ります眞宗に於ける信仰の妙味、實にこゝである。非常なる熱即ち大なる罪惡觀に於て、大なる涼味即ち救済の法悦を喜ぶことが出来るのであります。眞實、熱が無いならば別に外からの何等の涼味も必要が無いのである。或人は僕に

涼しい話

は宗教など云ふものは入らないと云ふ。私はかう云ふ人には決して反對をしない。熱がなければよいのである。然し若しもそれが譚語戲言だと大變である。よく病人が四十度四十一度など云ふ大熱になると私には熱が無いなど云ふ。若しやこれと同じやうな心的状態であつたならば大事である。然しながらかくの如き人にして、醫者も匙をなげると云ふ程の精神的大病人にして、時機純熟一度如來の醍醐味に觸るれば、實に一層の涼しき風光が生ずるのである。地獄の冥火化して清涼の風となると觀無量壽經に説かれてゐるのは、實にこの境地を説示したものであると思ふのであります。

これに就て思ひ出したのは一人の蜆賣の話であります。東京に、誠によく佛陀の慈悲を喜んで居た一人の同行がありました。毎日々々蜆を賣つては細い生活をして居たのであります。或寒い日の朝早く、何時ものやうに籠をか

ついで、蜆！蜆！と東京の市中を觸れ賣りをして本郷の切通しの坂に來かゝつた。御承知の如く高臺の方からこの坂を上野の方へ下つて來ると左手の方に岩崎久彌さんの廣い屋敷がある。立派な石で塀がこしらへてあつて木がこゝんもり繁つて居ります。かの蜆賣りがこゝへ來て一寸休息しようと思つて肩から下した時にフト思ふた。實に世の中は様々である。自分の様に九尺二間の汚い裏長屋にやつと足腰をのばして、三百六十日朝早くから冬は寒さに震へ夏は玉の汗を流して蜆を賣つてやつと命を繋いで居る。然るに此處の旦那さんは日本一の大金持、こんな立派な家に住んで、澤山の召使にかしづかれ冬は暖かく夏は涼しく何一つ不自由無く暮して居ると云ふのは何と云ふ幸福者だらう。然し待てよ、自分は有難い事には如來様のお慈悲を戴いて居る。未來の一段に於て何の不審も無い。若しこゝの旦那がお前のその心の喜びと、

わしの全財産を取り代へて呉れと云ふたら何とせう。あゝいやだ、金銀財寶は今生限り、自分の後生は永生 樂果である。して見ればこの貧乏暮しでも今の身の上は、このお邸の旦那よりも幸福者であると、お念佛を稱へ、又荷をかついで行つたと云ふことです。誠に尊い事ではありませんか。人生の涼味とはこれです、貧の上、罪の上に、益自分の幸福を感じる他力の救へは、實に最大の人生に於ける涼味ではありませんまいか。

明
と
暗

味ふべきものであります。しかし人間以外の動物と人間との相違は、言語が少

つて、自分の心持ちを、他に語ると否とにありません。この言語があつて、人間は大に發達したものだらうと思ふ。ゴリラなどは人間の最低級の者よりも立派なものが居ります。數でも六つまでは勘定するといふことです。しかし言語で以て、他のものに自己の思想を傳へるといふことが出来ないから、人類のやうに發達しないのださうです。ですから、この人類特有の特權ともいふべき言語を遣はないのはツマラヌことです。だから、こゝに御話しをするのですが、しかも自分の思想、信仰を口に出して、諸君に共鳴して貰うといふことは、非常な愉快であります。ですから、私は、自分の感じたことを御話しまして、諸君の中に共鳴して下さる人があれば嬉しいのであります。

私は肩書の通り、理學といふ算を通さなければ宗教の信仰を流す事のできない厄介な人間であります。で今日も「明と暗」といふ題を提げまして、宗

明中の暗
暗中の明

教の信仰を味うて見たいと思ふのであります。

さて、明と暗とは、概括的に申しますと、光のある所が明で、光のない所が暗であるといふことが出来ます。文明といふのも光があるから文明といふので、精神的の光があるのであります。野蠻といふのは、草昧といつて、精神的に暗いのであります。

しかれば明の方には暗はないか？ 暗黒の方には明はないか？ こゝがナカ面白いです。先づ文明に就て見ますれば、文明の中にも暗黒があります。今日歐洲の大戦争に於きまして、獨逸は獨逸で「我が帝國の戦ふは、これ神の命である」と云つて居る。露西亞は露西亞で「我れの立つのは神の命令である」と云つて居る。英國は英國で「我は平和のため、正義のために戦ふのである」と云つて居る。而して殘忍酷薄な事を盛んに行つて居る

暗中に光あり

太陽スペクトラムの黒線

だから今日では、悪魔が「神様、今暫く引込んで、おいでなさい」と云つてをさうです。これは文明の中に大暗黒のある確実な證據であります。しからば野蠻草昧の中に光はないか？今日文明の世の中に、髭をハヤシ、金縁の眼鏡をかけて、立派な顔をして居る人に、どうも心裡の暗黒があるのです。田舎の下層な人間の中に反つて精神の立派な明かな人が居ます。で文明の中に大暗黒あり、野蠻と卑しんで居る中に立派な光が輝いて居るのであります。

文明と野蠻が右のやうである如く、物質の方もその通りです。太陽の光をスペクトラムで分けて見ますと、白色な、あの太陽の光りが分れて、赤、橙、紫、堇、等、大體、七色に分れるが、此光の中に、大に暗黒がある。即ちスペクトラムに於て見ると、この中に澤山の暗い線がある。ダークラインがあります。このダークラインは、ナトリウムやハイドロゼンに關する

太陽の黒點
十一年のヒ
ソオツド

明と暗

ものであります。すれば明かなる七色中に澤山のダークラインがあるから、明の中に暗のあることが、事實の上に證明されて居るのであります。

また、これと反對に暗の中に明があります。即ち太陽の赤色からバイオレットまでは、可視光と云つて見える光であるが、また赤の光より内の方に赤内光、紫の光よ、外方に紫外光といつて、眼に見えない光があります。

紫の外の方にある紫外光は、寫眞の種板に感ずる光で、目では光と認めないものであります。赤内光は熱でありまして、化學的作用をするのは、前の紫外光であります。

かく考へて來ますと、目にも見えない暗黒中に光のあることは否むことが出来ません。

それから太陽の本體に就て云つても、さうであります。光つて居る太陽の

中に黒點があります。これが澤山にあります。此の黒點は大に増すことも、また減ることもあります。大正二年までは段々減つて、大正二年が一番減つた時である。三年からまた段々増して居る。この黒點の増減は約十一年をピリオッドとして居ります。しかも世界の大戦亂は此の黒點の増減と關係があるやうです。人事界の出来事が自然現象に關係あることは大きいものです。此度の大战争は恰もこの太陽の黒點の減つた極點で初まりましたから、黒點の増すのと共に増大して来たのです。地球上に於て大暗黒たる大战争があると共に、太陽の上にも漸次暗黒が増して居るのであります。しかもこの暗黒の點の増す時が、太陽の活動の盛んな時であると云ひます。地球上の暗黒もまたさうであるかも知れぬ。地球の暗黒が増すと共に各國の活動は盛んになります。

兎も角、明中に闇あり、闇中に明ありといふことは、かく物質上から説明することが出来るが、これが精神上にも符節を合するが如くであるのは、非常に面白く感ずるのであります。

この事は諸君も御承知の通り、既に石頭希遷禪師が言つて居る。參同契の中に

暗中有明 明中有闇

と云ふ語がある。

一寸、話を挿みますが、太陽の光の中に、暗中有明、明中有闇といふことは、今話しましたが、クルクス管と云つて管の中の空気を稀薄にした管の、一方が陰極、一方が陽極として、これに電氣を通すと、陰極から陽極に向つて一種の光が出る。この光線は目に見ることが出来ない、わからない光で

暗黒の幸福

あります。だからエツキス光線といふ。この X 光線は目に見えぬ。即ち暗
 であります。しかし寫眞の種板には感ずるのであるから明とも云へる。眞黒
 の布などは、太陽の光は全く吸収されて了ふが、エツキス光線は如何に眞黒
 の布でも徹ります。で、このエツキス光線は、太陽よりも一層明なるもので
 あると共に、一方から云ふと、太陽よりも一層暗であるといふことが出来ま
 す。西暦紀元千八百九十八年、キユーリーによつて発見されたラヂウムは
 アルハ、ベータ、ガンマといふ三つの光りを出してゐます。殊にガンマ
 線はエツキス光線とよく似て居りますが、この線は金屬までも徹します。エ
 ツキス光線は金屬などは徹りませぬが、ガンマ線は、金屬でも木でも石で
 も何でも徹します。或る學者が金屬性の管に入れて洋服のポケットに入れて
 置いた所が、皮膚にまで徹つて居つたといふことです。ところがこのガンマ

線が一番徹りにくいものは鉛であるのです。金でも銀でも鐵でも何んでも
 徹るこのガンマ線が、日常馬鹿にしてをる鉛によつて吸収されるのです。
 面白いですなア。人間も偉さうにして居る人よりも、馬鹿といはるゝ人が、
 反つて偉いかも知れませぬぞ。我々は決して明を羨んではならぬ。反つて暗
 黒の中に價値を見出すのであります。吾等は透明が幸か？暗黒が不幸か？ガ
 ラスが結構か？石炭が結構か？ガラスはこのストーブの中に入れても我等を
 暖めて呉れませぬ。石炭は光や熱を與へてくれます。ガンマ線の如き光ま
 でも吸収するのは鉛です。一切の光を吸収するのは暗黒のもです。暗黒な
 ものは一切の光を吸収し、熱と光を發します。透明體は光を吸収する能力
 がないと共に、光や熱を發しませぬ。月は暗黒な天體であります。暗黒なる
 が故に、太陽の光と熱とを吸収して、光と熱とを我が地球に發します。そし

透明を以て
任するもの
不幸

て月は美人に喩へられ、詩に歌に歌はれます。太陽が歌はれたことはあまり聞きません。諸君！暗黒が幸か？明が幸か？大に疑問であります。

これと共に精神的の方面は、どうです。基督教もつまらぬ、日蓮もつまらぬ、天台も眞言もつまらぬ、宗教など、どれもこれもつまらぬと云ふ人は、所謂透明體の人です。つまり一つも吸収することの出来ないものであります。これに反して暗黒なものは幸です。田舎爺々婆々は暗黒です。法然聖人も愚痴の法然坊でした。親鸞聖人も愚禿でした。みな暗黒です。

松影の闇きは月の光かな。

明月や壘の上に松の影。

愚痴の法然、愚禿親鸞といふ暗黒のあるのは、明かな光に照されて居るからであります。明中に暗あり、暗中に明あり。眞に暗黒なりと自覚したものの

は、其處に光明があり實に偉大であります。之に反し自ら透明體を以て任する人には必ず暗い一面が潜んで居る事を忘れてはならぬと思ひます。

塵埃の恩恵

厄介なもの

我々の世界には随分厄介なものが多いが、中にも塵埃は主なる一つであらう。この塵埃にはいろいろの種類があります。まづ第一に黄土。この塵埃は支那には殊に多い。それゆゑ、この黄土が川に流れて黄河と呼ばれ、海に入つて黄海となる。また人間が死んで埋葬するときも、この黄土の中へ埋めるのであるから、死んだことを黄泉の客となると云ふ。ところが我國あたりでも盛んに此の語を用ひて甘んじて黄泉の客となつてゐるのは、片腹いたいこ

とであります。次には赤土であります。これも、なかく／＼に多くあります。次には黒塵。この黒い塵埃は煙突の口などから特に澤山出でます。次には鼠色の塵。これは非常に広い範囲にゆき互つて、大抵の塵埃はこの鼠色のものであります。

その存在

さて此等の塵埃は、市街の道路や無精な部屋ばかりにあるのではない、ありとあらゆる天の下、陸上であれ海上であれ、實に地球の全表面に互つて存在してゐるのであります。我々が存在してゐないと思つてゐる太平洋の真中印度洋の沖合、さては富士山の頂上にもあるのであります。これには塵埃の數を計算する器械がありまして、或る地方に於て、その地方の一立方センチメートルの空氣中には、何萬の塵埃があるかを計ることが出来るのであります。現に或る學者が印度洋の沖合で試験したことがあります。随分ノンキな

降雨の恩

人もあるものです。つまりこの塵埃は、全地球を隈なく包んでゐるのであります。

ところが平生、私共はこの塵埃を無用視してゐる位でなく、これを忌嫌し排斥してゐるのであります。が其實、非常に力ある有用なもので、我々はこの塵埃に洪大な御恩を蒙つてゐるのであります。

今その二三を述べて見ますれば、第一、あの天空が蒼く見えるのは、如何なる理けでありませう。もし世間では「一碧拭ふが如き蒼空」など形容しますが、實はこの塵埃によつて蒼く見えるのであります。もしもこの塵埃がなかつたなら、決して蒼くは見えませぬ。また日の出や日没の時に空が赤く見えるのは塵埃の力であります。

斯様なことは直接、吾々の生活には何等の關係もない。空が蒼く見えても

一向差支ないやうである。たゞ吾々の美感を増す位のものである。しかし塵埃の力はなかく是位の者ではない。

そもく雨はごうして降るかど申しますと、空氣中の水蒸氣が飽和の状態になると、水滴即ち雨となつて降るのであります。飽和と云ふのは食ひ過ぎです。空氣中に水蒸氣を食ひすぎると、そこで凝結して雨滴となるのであります。ところが、その凝結して雨滴となる時に當つて、何か核心になるべきものがあると、それを頼り力にして、すぐ凝結することが出来るのであります。が若しも核心となるべきものがない時には、なかく凝結することが出来ません。だから粒が餘程大きくなるのであります。ところが、この塵埃が空氣中に浮游して居れば、これを核心として、すぐに雨滴に凝結するから、大きな雨滴とならず、いゝ加減な細雨となつて降るのです。で若しも塵埃が

日光調節の恩

なかつたならボールのやうな大きな雨が降つて來ることになる。しかるに塵埃の御蔭でかゝることのないのは、正に塵埃の恩恵であると云はねばならぬ眞言宗などで請雨の時、護摩をたくのは、つまり塵埃を空中に發散させて、水蒸氣をして早く雨滴に凝結せしめやうとするのであるから、道理に契つたものと云へる。また西洋などの請雨法は、普通空砲を發つが、これも空氣の平均調和を破り塵埃を送りて水蒸氣を早く凝結さすのであります。

次に塵埃は丁度、蒲團のやうな役目をして呉れます。地球の表面に此の塵埃があるから太陽からの輻射を調節して、冬は太陽の熱を保持して我々を暖かくし、夏は天幕となつて日光を覆うて涼しくして呉れるのであります。もしも塵埃がなかつたならば我々ばかりでなく一切の禽獸草木は悉く焼き殺されるであらうと思ふ。或る學者の計算によると、もし地球の表面に塵埃が

なかつたならば、少くとも今日までの空氣の溫度よりも攝氏の二十八度位はたしかに暑くなると云ふことである。さうすると夏期は勿論のこと、冬期でも吾々の堪へ切れぬ暑さである。これが塵埃の御蔭に依つて、斯うして生物が生きて居られるのであります。

太陽の財産

最後にもう一つお話しねばならぬ。地球上の森羅萬象の生活の根元は、偏に太陽にあるといふことは、恐らく誰人も否定するものではありません。ところが、世の通規としてこの世の如何なるものでも使用すれば減ると云ふことは明かなことである。収入のない、支出のみの財産であつたら、如何なる巨萬の富も竟には無くなるのであります。今我々の命の親たる太陽は幾千萬年の昔から、不斷に常恒に熱と光とを發散してゐるのであるから、竟には家財ならぬ火財が漸次減少してツブレルやうなことになるはしないか。これは

戲談でも何んでもない、實際今日の學者が常に頭を痛めて居る重大な問題なのであります。ところが、いろいろ調査研究して見ると、神武天皇時代の太陽の熱と光との強さと、今日のそれとは、相違がないやうである、つまり太陽の財産は昔も今も異動がないのであります。

減らぬ理由

これは一體どういふ理であります。勿論これには種々の原因もありませうが、其の原因の一つは確かに塵埃の力であります。これは少しばかり説明せなければ解りませぬが、御承知の如くこの地球へは澤山の流星が落下して來ます。その落ちて來る割合は一年の中、八月と十一月とが一番多いやうであります。而して一年間に凡そ如何ほどの流星が落ちるか云ふと、まづ一千萬噸だといふことです、一千萬噸と一口に云へば何んでもないが、なかなか大したものです。あの九州の石炭坑で何萬人と云ふ坑夫が一年中かゝつて

一生懸命に掘り出す石炭の量位だと想像すればよろしい。これだけの塵埃は一年間に落ちて来るのであります。これは地球のことですが、宇宙は平等なもので、地球以外のすべての星にも亦落つるのであります。で太陽にも亦その引力によつて多くの流星が落つるといふことは疑ふことは出来ぬ。然るに地球の百三十萬倍といふ大きな太陽に、どれほどの塵埃が落つるかといふことは想像も出来ないほど多量であります。で、この多量の收入があるから太陽の財産は少しも減らぬのであります。つまりこの宇宙の塵埃が太陽の熱と光が何時まで経つても衰へぬ有力な原因の一つであると云ふことが出来るのであります。

恩知らず

我々生命の根元であり親様たる太陽そのもの、光や熱の源の一つは正に此の塵埃であるとすれば、塵埃は實に親の親、根元の根元であります。私

塵と微菌

共の親の親たる塵埃様の御恩また洪大無邊であると申さねばならぬ。然るに御互は、此の廣大なる御恩を御恩とも思はず、平生は忘れてゐるのであります。忘れてゐる位でない、いつも厄介視してゐるといふは誠に恩知らず、恩ぬすみの盗賊であると云はねばならぬ。

以上述べました所は塵埃の善い方面でありますが、すべて世間一切のものはみな表裏、善悪の両面がありまして、この塵埃にも悪い方面もあります。即ち塵埃は種々の微菌とは至つて親密なものであります。いつも此の二つのものは共同生活をしてゐます。だから、前申しました如く塵埃其ものは悪いものではないが、それに伴うてゐる微菌が悪いから、これの入らぬやうに注意せなければならぬ。

それからまた、この塵埃は、しばしば鑛山などの爆發する誘因になります

塵埃が坑内に充滿すると、すぐに火を呼んで其が爲に坑内の瓦斯が一時に爆發して何千人、何萬人といふ多數の人間を犠牲にしてしまふ。實に戦争よりも悲惨な現象を引き起すのであります。それゆゑ鑛山などでは始終、水を撒くとか岩石の粉を散布するとかして、塵埃の充滿を防いで居ります。これらは塵埃の悪い方面であります。

佛教と塵埃

さて以上縷々申しましたことは塵埃に關する物質的方面の説明であります。已下少しくその精神的方面のお話をして此の講演を結ばうと思ひます。

佛教におきまして俱舍や唯識などの宗旨では、我々の眼耳鼻舌身の五官に觸れる境、即ち色聲香味觸法を六塵と申して嫌ふべき塵埃としてあります。是は我人の心を汚濁する故であります。即ち塵埃の悪い方面を見たのでありませう。ところが天台や禪になりますと、あなたが悪い方ばかりではありま

せん。即ち天台宗では一念三千と云つて吾が芥爾の妄心の中に三千の諸法が蘊在すると云つてゐます。これ塵埃の力用の廣大なことを云つたのであります。また佛光禪師の『入道の偈』に「竹影拂 楷埃不動。月穿潭底 水無痕」と云ふのがある。皎々たる明月の夜、縁側に映つてゐる竹影が、吹く風のまにユラ／＼と動けども少し塵埃も起さない。また一點隈なき月光が深い潭の底までも徹到してゐながら少しも水を動かさぬ。これがもし杖のやうなものであつたら、潭底は愚か、水面へ一寸觸れても大波小波を起すのである、が月は潭底を穿てども水、痕なしと云ふ、實に云ふに云はれぬ甚深微妙の味ひがあるのであります。同じく禪宗のことですが北宗禪の祖、神秀の偈にやはり塵埃に關したことがあります。

身是菩提樹。心如明鏡臺。時々勤拂拭。勿使惹塵埃。

それから南宗禪の祖、慧能禪師、この人は御承知の米舂をしてゐたのです
が、上の神秀の偈に對して

菩提本無樹。明鏡亦非臺。本來無一物。何處惹塵埃。

といふ偈を造つて第五祖弘忍から鐵鉢を授かつたと云ふことであります。

これらは、みな心の塵埃の始末でありまして、我が淨土眞宗に於きまして
も煩惱の塵埃の、あながち厭ふべきものでなく、むしろ、その存在の有り難
きを思ふのであります。「和讃」に

眞宗と煩惱
の塵

無碍光ノ利益ヨリ

威徳廣大ノ信ヲエテ

カナラズ煩惱ノコホリトケ

スナハチ菩提ノミヅトナル。

罪障功德ノ體トナル

コホリトミヅノゴトクニテ

コホリオホキニミヅオホシ

サハリオホキニ徳オホシ。

盡十方無碍光ノ

大悲大願ノ海水ニ

煩惱ノ衆流歸シヌレハ

智慧ノウシホニ一味ナリ。

本願力ニアヒヌレハ

ムナシクスクルヒトソナキ

功德ノ寶海ミチノテ

煩惱ノ濁水ヘタテナシ。

本願圓頓一乘ハ

逆惡攝スト信知シテ

煩惱菩提體無二ト

スミヤカニトクサトラシム。

これらはみな、煩惱菩提體無二で、煩惱其のまゝ涅槃、塵埃そのまゝ菩提
といふ、御教であります。物質上から云つても精神上から云つても、塵埃の
恩恵、また洪大といはねばなりません。

科學と宗教

人類の二大
慾望

人間は慾望に生きる動物である。小兒の生れて自然に乳房を探る時から、名残を惜んで死んで行く時まで、全く慾望に生きてをる。其慾望には、大なる慾望、小なる慾望、高尚なるもの、低級なるもの、幾百千といふ數を知らない程であるが、今之を大別すると、生存の慾望と、知識の慾望との二つに分つことができる。

生存の慾望といふは、死に度ない、永久に生きたいといふ慾望であつて、人類根本の慾望である。傳説によれば彼の石川五右衛門の如き男すらが、熱湯の中につけて、耐へ切れないで、遂に愛兒を下敷に、僅かに數分間の生命

を惜んだといふではありませんか。實にこの生命の前には妻子もありません財産もありません、名譽も地位も何の價値も無くなるのであります。天變地異に際しては、先づ身を以て逃るゝといふのが、イキとし生けるもの、根本的慾望が、生存慾にあるといふことを證明して居ます。先般、筑波艦爆發の際、慰問 参りましたが、百四五十名の死んだ人が何れも生んとして、あらゆる努力を拂ふた形跡が、歴々として讀まれたのであります。又、重傷者の如き、全身焼け爛れて、呻吟いてゐる中から、猶且つ極力、生きんと努むるを見ては、如何に人間の、生存慾が強いかわ知らるゝのであります。かくも生きんとして極力努力する吾人人類の生存慾は果たして満足せらるゝのだらうか、如何なる方法によつて満足せらるゝのであらうか。如何にも生きんが爲めに食うてはをる、けれど生は依然限定されてあるではないか。

資産家は其全財産を投じて、生存を得たいと欲するであらう。しかも永久の生存は得られないではないか。こゝに吾人は煩悶せざるを得ないではないか。こは、吾人が最も真剣に、最も真面目に考へねばならぬ問題ではないか。如何にすれば、永久に生存し得るや、といふ問題、これぞ人類の根本問題であります。

次に、知識慾であります。この慾望は生存慾程、真剣なものではないが、人類には離るゝことの出来ない慾望であります。知りたいといふ慾望は、小兒が生れて、周囲の見えかけると、直ぐキョロ／＼と、四邊を視まわす、言葉を知り出すと、種々なものゝ名を尋ねたがる。名を聞くと、それはどういふ譯かと聞き返すのも、皆、この知識慾の満足を求めてをるのであるが、これが遂に今日の文明を來たしたのであります。今後人類のあらん限りは、

學術は果して知識慾を満足するか

この知識慾が現はれて、あらゆる發見、發明に努力するであらうが、果して之れが満足さるゝ期があるであらうか。又如何様にして満足し得るか。科學によるか、哲學に行くか。これは、大に考究を要する點であらう。要するに、吾人の二大慾望なる、生存慾と知識慾とは、如何にして満足さるゝやといふのが、吾人の根本問題でありませう。

知識の慾望を満足させるものは、先づ今日の學術といふものである。然らば、其學術は果たして知識の慾望を満足さしてくるであらうか。或は又知識慾は學術ばかりでは満足し得られないものであらうか、その研究をする必要がある。世は随分科學を過信し、科學によりてあらゆる知識慾が満足さるゝのみならず、生存慾をも遂には科學によりて満足せらるゝものと固く信ずる所謂科學萬能主義といふのもある。

けれど、果して、科學なるものが、七かく徹底的のものであるか、又其眞理と稱するものが、果して萬古不易の確かなものか、而して又科學によつて總ての問題が、快刀亂麻を斷つ如く解決するものであるかといふことは、大いに考究する必要がある。

物理學の泰斗ニュートンは、其長い献身的研究の結果、天地萬物は知れぬものだといふことを知つたと歎じたではないか。如何にも、電氣の説明は如何程聞いても、電氣そのもの、實體は遂に不可解ではないか。萬有引力の法則は知れてあるが、その引力とはどんなものか、知れぬではないか。縦の振動は引力で、横の振動が光や熱だと説明するが、其縦横の振動といふのは如何にして起るのか、一向知れないではないか。エーテルは振動するといふが吾人は、其エーテルを感知することが出来ない、たゞさうした假定の下に説

明したまでであつて、少し先の方へ行くと分らなくなるのである。其上、其定めた原則なるものが、昨是今非で、一向確定せぬのである。

私が大學に居た當時は、元素は七十五元素と確定され、これで天地萬物を説明して居たが、今日では八十三元素位に増えて居る。位といふ不確實な文字を使うてをる。今後幾何増えるものやら知れないのであります。又元素は最早此上分析の出来ないものであると決められて居たが、今より二十年前（一八九八年）佛國のキュリー教授が、ラヂウムといふ新元素を発見したが、それが、元素の不可分析といふ原則を根柢から破壊して終ふたのであります。即ちラヂウムの中からヘリウムといふ瓦斯體が發散するといふ事實であります。ヘリウムへのといふ文字は希臘語の太陽といふ文字で、元々このヘリウムはこの地球上にはなく、全く太陽にのみある瓦斯體とせられてゐ

たのである。そこでこのラヂウムからヘリウムが出るといふことが大に學者の頭腦を絞らせた。茲に化學の大革命が起つて、元素が分析されないといふ原則は廢せられて、元素は更に電子(エレクトロン)に分析され、そしてこの電子の集合の數と集合隊形とが異なるに従ひ種々異つた元素が生じるのだといふ説明を加へたのであります。今後更にこの電子説が如何様に變化して行くべきかは、豫言することは出来ないであります。

また科學の發達しないアラビヤの昔、鐵を銀に、鉛を黄金に變化し得らるゝや否やを研究させた王様があつた。その時學者等は、研究の結果、鐵、銀、鉛、金は、各天然固有のものであつて、決して甲が乙に、乙が甲に變ずることは出来ないといふと申上げた、然るに僅かに二千年後の今日では元素から元素が出来るやうになつた。即ち今日金剛石、黄金よりも尊重せらるゝラヂウー

ムも、遂には鉛に變化して終ふといふのである。然らば鉛が黄金にならないとは保證の限りでない。或は今後幾年かの後には、黄金製造株式會社が出来て、盛んに鉛から黄金を作る時代が来るかも知れない。かくの如く、物理化學の學説といふものが、決して動かぬ千古不變のものとはいへない。若し始終動き變るものであつたならば、一日もそれによつて満足し、安心して居られないではないか、動物學、植物學、又然りである。少し奥の方へ行くと、全く不可解に行き詰るのであります。天文學の如き全く然りである。今日星の數が一億あつて、最も地球に近い月ですら十萬里ある。七夕の牽牛織女と稱ばるゝ星までは、十六光年の距離だといふ。一光年といふのは、一秒間に七萬七千里飛ぶ光が一年間に飛ぶ距離を一光年といふのであるが、殆ど想像もつかぬ距離ではないか。それが一千光年二千光年の距離にある星がある

といふ。割合に近い所で四百光年の星だといふ。丁度、天正元年、織田信長時代にビカリと出た光が今日漸くこの地球に到いて、吾人の眼に今夜當り入るといふ、大きな話だが其廣大な天文學が僅か十萬里向うの、つい鼻先にある月の後姿を見たことがないのである。幸か不幸か、月の自轉と公轉とが、其時間に於て殆ど等しいといふ所から、遂に天文學者は、永久に月の他の半面が見られないのだといふことであります。

つまりは、何事も分らぬといふ事になる、分らぬといふのが眞實であります。ニュートン程の學者になると始めてこの分らぬといふことが知れてくるのであります。つまり、學問すればする程益分らぬやうになつてくる。之が不満足だから研究をやる。そこで進歩するのだといふのが科學の面目であります。そこで科學によつては、到底知識慾をも満足出来ないといふことに

二大慾望と
佛敎

なるのであります。

昔、秦の始皇帝が求めたといふ不死の靈藥は、今日の科學からも依然得ることが出来ないのである。吾人、生きとし生ける人類の根本の二大慾望は、遂に科學からは得られなかつたのであります。然るに一方吾人の慾望、切に満足を求めて止まないものであります。しからは如何にして此二慾を満足せしむべきや。宗教の門戸は、茲に開かるるのであります。

宗教というても其種類が澤山ある。そして單に生存慾の満足を得る爲めには、或は劣等の宗教に依つても得られやう。けれど知識の慾望は到底劣等なる宗教によりては満足せられないのであります。この二つの慾望を完全に満足せしむる宗教を求めねばならぬが、佛敎の如きは此要求を満足するによさわしいものであります。

從來佛教は誤解されてゐる。佛教といへば直ぐ老人、死を連想するが、これは大きな誤りである。佛教は不死を談ずる教である、永久に生きる相談である。こは釋尊の出家の動機を見ても直ぐ知れることである。即ち、釋尊は死といふ現實の問題を見て、大いに悶えられた。さうして如何にして永久の不死が得らるゝだらうかと考へるやうになつた、これが出家の動機であります。たとへ王位を捨て、も此問題を解決せねば止まなかつた。釋尊は如何に猛烈に生存慾の満足を要求されたか、推察し得られるではないか。釋尊の出家は全くこの永久の生を求むる爲めであつた。佛教に教ふる所、全くこの外はないのであります。

眞宗の根本經たる三經を見ても、死といふ文字は殆ど見當らないが、到る所、生を説いてある。四十八願の一々に、皆「若不生者、不取正覺」と生の字

に満ちてある。死んでも死なないといふ教であります。譬へ肉體は死すとも精神は死なないといふ教である。死ぬのではない、眞實の都に生れるのだといふ信仰に生きるものであります。されば祖師親鸞聖人は、長生不死の神方ぞと讚嘆し給ふたのであります。

抑、阿彌陀佛といふ言葉は、光明無量、壽命無量といふことであります。光明無量といふことは、光明は智慧のすがたなりで、無量の智慧といふことであります。さうして、壽命無量といふことは、讀んで字の如く、無限の壽命といふことであります。そこで、この無量の智慧と、無限の壽命とを満足したる姿を阿彌陀佛といふのであります。こは全く人類の根本的慾望たる知識慾、生存慾の満足したる姿であります。我等一念この南無阿彌陀佛を信するや、我等は彌陀同體の證を開かせて頂くのであります。即ち、この私が

智慧と生存とを満足したる境地に遊ぶことが出来るのであります。茲に人類千古の間はれて、大満足を得ることが出来る。されば阿彌陀佛の又の名を、「大安慰」というて、私共の大慰安者であるぞと歎じられたのであります。茲に一つ諸君の疑問が残つて居る。實際問題として阿彌陀佛の信者が眞箇に生存慾の満足を得て居ることは、事實であらう。けれどあの一文不知の老婦を以て、無限の智慧の満足者とは、合點がいかぬといふことである。いかに一文不知の老婦は、理化學の知識は少いけれ共、人生の根本に溯りこの知識がそんなに尊いものであらうか。死生の問題と匹敵する程に尊いものであらうか。抑も知識慾もそれが死生の問題に觸れたもの程、眞剣なものであらうか、知識慾も、矢張其根本は生存の問題にあるのである。生の從來する所を知らず、死の趣向する所を知らずといふのが、尤も知識慾の根本的

のものであるとして見れば、生死の道に安心した者は、根本的に知識慾に満足したものだといはねばならぬ。されば生死の問題に安心した老婦は、たとへ一文不知の尼入道と雖も、根本的に知識慾を満足したもので、之れぞ大智者と稱すべきであらう。「信心の智慧」とも「智慧の念佛」ともいうて、信心こそ第一の智慧ではあるまいか。

さもあらばあれ、死の瞬間に彌陀同體の證を開くのだとの信仰は、智慧と壽命との満足を得て、たとへ肉體は死すとも、精神の不死を得たものである。即ち死する所以は、生るゝ所以であると證るのであつて、永久の生命を得たともいへよう。彌陀と共に、永久に生きやうといふ信仰は、生存慾、知識慾の満足された、光明無量、壽命無量の圓滿なる覺體と不二不異の妙境であります。阿彌陀佛の宗教は全くこの永遠に生きる道を教へたものであります。

自然観

萬事の本

私は自然観といふ題を出してお話し致しますのですが、何によらず、自然を観察するといふ事が總ての事の本であると思ひます。

思ふに、我々は生れるから自然界と接觸し、知らずくのうち、此れを見、聞き、此れが、學問の進歩、美術の發達となり、人間界の幸運をもたらして來たのであります。して見れば、自然観を今爰に述ぶる敢て徒事ではないのであります。而も此の觀察は、常に人類の專有物ではない。鳥といふもの、獸といふもの、皆自然観をしてゐる。而し、彼等は觀ては居るが深く考へるといふことをしない、そこが人間と大なる徑庭を造るものであります。

禽獸と自然観

然らば、人間の自然観は如何であらうか。今其の要を摘んで話して見ようと思ふ。

扱て、人類が自然界を観察する、それは十人十色、百人百色で、其の人の境遇、精神狀態等が違つてゐる。が、ざつと其の觀方を分けると五通りになる。

普通觀察一

(1) 普通觀察——此れは十人並の觀方で、春が來れば梅が咲く、香ばしい花ちやとては喜び、散つたというては悲しみ、夢のやうに自然の變遷を見、夢のやうに忘れて行く。即ちそれが今いふ普通の見方であります。

美的觀察

(2) 美的觀察——此れは彫刻をする人、繪をかく人の眺める自然観で、美術家は美的觀察をする即ち鳥を見た、直ぐ一管の筆で、さも鳥らしいものを顯はす、彫刻また然りで、總て自然に對しての美的觀察の表現でないものはな

い。此れ即ち一種の審美眼を持つて居れば了解しないことであらう。
 或る繪師がいふのに「月を眺めても、春の月、夏の月、秋の月、冬の月、
 繪師から見ればみな異うてゐる。春の月をかくのにはそれでは如何いふ色で
 顯すかと問へば、幾分花色の色彩を加へる。すると如何にも臙の華やかな月
 が顯はれて来る。而し、月そのものに花色があるか如何か、それは學術的に
 言へば問題かもしれぬ。それが審美眼から見れば、春の月だと首肯すること
 が出来るから妙である。

世に、ゑそらごとといふことがある。或る人が繪師に竹をかいて呉れと頼
 み、出来上がったのを見ると、赤い繪具でかいてある。其の人は大に失望し
 た、さうして繪師にいふには「誠に結構であるが、眞赤の竹ではどうも満足
 が出来ません、貴殿は何故赤い繪具をつかうてかいたか。」繪師は此の言をき

いて「然らば、あなたはどんな色で書いて欲しかったのですか」ときくと、
 「矢張り墨色で願ひたかつた」そんなら、伺ひますが、何處に墨色の竹が生
 えてゐますか」と言はれてハツタと返答に困つたといふことであります。世
 の中に黒い竹が生えてゐないと同じことに、赤い竹も生えてゐない。繪は虚
 事である。實物の色その儘を顯すのみが繪でない、眺めたその時の感じを顯
 はすのが繪であります。若し、眞に實物の通りと願ふものあらば、盆栽を眺
 めてゐればいゝのである。

次に「夏の月」はどんな色でと言へば眞白ろ、「秋の月」は晴れ渡つた空にか
 らる、如何にもすみ渡つた月ですから、少し青味を帯ばしめる。「冬の月」此
 れはむつかしい。で、黒い色を以てする。どうしても眞黒ではない、鐵を磨
 いた色、所謂、鎌の色で、この黒ろがねの色を以てすれば木枯吹き荒ぶ冬の

夜の月を顕すに最も適當である、此れ即ち美的觀察よりした月であります。否、月のみに限りません、萬事美術家の眼から見れば、面白い感じがそこに存するのであります。

學術的觀察

(3) 學術的觀察——今、こゝにコップがあります、此れをコップありと見るは普通の觀察で、此れは何と何から出來てゐると見るのが學術的の觀察であります。

同じ月を見て、歌人は美人に形容し、繪師は色で區別をし、學者は此れを分析的に説明しようとするのである。

私は、三十九年の九月四日東京の中央天文臺の望遠鏡の下に立つて月を見せて貰ひました。玉兎だの、何だのいうてゐるものを直徑一尺二寸の鏡の下で見ると大變なちがひである。友人が三筋許りの糸で大砲大の望遠鏡を操

つて見せてくれたが、實に案に相違して穢い、大あばただらけである。このあばたが、悉く火山で、此方ではいろ／＼な名をつけてゐる。其の噴火口があばたの面に見えてゐる。それが、地球上の火山に比べると約三倍乃至五倍の大きさがあるといふ。即ち、地球上で最も大きな噴火口を有つてゐるのが、我が國の阿蘇山で、直徑六里もある。日本は憚り乍ら地球全土に互つて一番最大の噴火口を有つてゐると言はねばならぬ。所が月に於る火山の噴火口はこれよりも數倍大きい、かやうに噴火口が残つてゐる所から見ると、過去の月は、烟を吐いて非常に大活動をしてゐたに違ひない。

世間でも、菊面を見ると、今は丈夫であるが、あの病の時には、どんなに苦しかつたらう、と思ふと同様である。かくの如き觀察が月に對してなされる、といふのも、月は地球から十萬里、それが實にお隣であつてお月さん程地

球に近いものは天體中にはないのであります。而もよく聞いて見ると、それは赤の他人ではなくて、地球の別家であるさうです。別家であつて御隣に住んでゐるのですから、最も研究が出来易いのです。

が、こゝに學者が泣いてゐることがある。それは、お月さんの後を見たいといふことです。此の美人、うしろ姿を見せぬといふ評判が立てば、尙更に見たくなると同様にどうあつても見たいが見せてくれない。といふのは、月が地球の廻りを一廻轉するのが二十七日餘、月が一遍自分の軸を廻るのも同じ二十七日餘かゝる。かやうな理由でどうしても、お月様の後ろ姿が見えないのであります。此れが學術的觀察でありまして、非常に氣長い話であるが此れが學問の基礎になるのである。英國のワットが鐵瓶の湯氣の立つのを二時間もヂツと見てゐた。その母は呆れて馬鹿だ阿呆だかと心配してゐたの

道德的觀察

に、それが今日の世界のためにはなくてはならぬ蒸汽機關の發明をなした。即ちワットが湯氣そのものを學術的に觀察した賜に外ならぬのであります。地上のもの、電信、電話、水中をもぐる潜水艇、大空をかける飛行機、一として學術の研究にそのものを置かないのはない。

遇ひたい、見たい、飛ぶ翼が欲しいと口説いたは、それは昔のこと、今は現に、翼持つ鳥よりも立派に飛んでゐる機械がある、即ち此れ學術的觀察の賜ではありませんか。

已上述べましたのは、學者の研究眼より見た自然觀でありますが、次で言ふべきは道德的觀察であります。昔から自然の風物から教訓を受けて發奮した人も一人や二人ではありませんが、又此れを俳句によんで古人が残して置いて呉れたものも尠くはありません。即ち、「藤の花」といふ題で、